

高情研

情 報 教 育 研 究 会 誌

第7号

埼玉県高等学校連合教育研究会

埼玉県高等学校情報教育研究会

2010

目 次

[巻頭言]

あいさつ

矢部 秀一（埼玉県高等学校情報教育研究会会長・埼玉県立川越女子高等学校校長）・・・ 1

[寄 稿]

埼玉県高等学校情報教育研究会誌に寄せて

荻原 康之（教育局県立学校部高校教育指導課 指導主事）・・・・・・ 2

埼玉県高等学校情報教育研究会誌に寄せて

須藤 崇夫（県立総合教育センター 指導主事兼所員）・・・・・・ 3

[総会・講演会]

平成22年度埼玉県高等学校情報教育研究会総会・講演会報告

亀井 義弘（埼玉県立浦和北高等学校 教諭）・・・・・・ 4

[全国大会]

全国高等学校情報教育研究大会報告

春日井 優（埼玉県立朝霞高等学校 教諭）・・・・・・ 6

[施設見学会]

平成22年度埼玉県高等学校情報教育研究会施設見学会報告

田口 義弘（埼玉県立草加西高等学校 教諭）・・・・・・ 9

[授業見学会]

平成22年度埼玉県高等学校情報教育研究会第1回授業見学会報告

曾田 正彦（埼玉県立川越西高等学校 教諭）・・・・・・ 13

[研究委員会]

コミュニケーション能力の向上を目的とした授業の工夫

埼玉県高等学校情報教育研究会 研究委員会・・・・・・ 16

[投稿論文]

写真からムービーを作る

西澤 廣人（埼玉県立芸術総合高等学校 教諭）・・・・・・ 33

Webページの制作 ―作品の制作意図を言語化する授業の実践―

春日井 優（埼玉県立朝霞高等学校 教諭）・・・・・・ 37

[事務局より]

平成22年度 事業報告

鈴木 成（埼玉県立不動岡高等学校 教諭）・・・・・・ 42

埼玉県高等学校情報教育研究会会則

・・・・・・ 43

平成22年度 埼高情研 役員・事務局一覧

・・・・・・ 46

編集後記

柳澤 実（埼玉県立妻沼高等学校 教諭）・・・・・・ 48

【巻頭言】

あいさつ

埼玉県高等学校情報教育研究会 会長 矢部 秀一

(埼玉県立川越女子高等学校長)

平成16年1月、高等学校情報教育研究会の発足後、平成17年度第2代会長として1年間お世話になっておりましたが、第4代会長舘眞一先生のご退職により、第5代会長として再度大役を引き受けることとなりました。全国大会をはじめ、授業研究会、施設見学会、研究委員会など慌ただしい1年ではありましたが、会員の皆様の献身的な熱意と県教育委員会及び埼玉県高等学校連合教育研究会の御指導・御援助により、各種事業の実施並びに1年間の総まとめである「研究会誌第7号」の発行ができるに至りましたことを御礼申し上げます。

特に、県教育委員会高校教育指導課指導主事荻原康之様、県立総合教育センター指導主事兼所員須藤崇夫様におかれましては、お忙しい中、ご執筆いただきありがとうございます。感謝申し上げます。

さて、本年度の事業については、振り返りますとほぼ計画通りの実施であったかと考えております。会議の精選がいわれておりますので回数を増やすことができず、研究委員会や授業見学会など兼ねて実施し、効率化を図っております。事業以外でも個人的に積極的に研究されていることも聞いております。たいへん嬉しい限りです。

5月の総会では、記念講演として、東京大学大学院・情報学環教授 西垣通先生に「ネットとリアルの間：真の情報倫理を求めて」と題してお話いただきました。

全国大会は、金沢市の金沢工業大学にて開催されました。本県からは、副会長以下7名の参加を得ることができました。本県関係は分科会での研究発表として、坂本峰紹先生（新座柳瀬高校）と中島聡先生（大宮武蔵野高校）に担当していただきました。多くの参加者から積極的な質問があり、本県の発表に対し関心の高さを感じさせるものとなっております。平成23年度は8月5・6日に大阪経済大学で開催される予定です。

施設見学会は夏季休業中に最新の情報提供を兼ねて、専修大学ネットワーク情報学部の生田キャンパスを訪れました。昨年あの猛暑の中、13人の参加をいただきました。学部のカリキュラム説明、情報教員の養成のお話し、施設見学、学生による模擬授業及びディスカッションなどを通して情報学への取組の本気さを感じて来ました。演習や実習をする

にあたって、あえてグループワークを作り学習課題に取り組ませる実践は、指導や評価の難しさを知る本会会員も参考になったのではないのでしょうか。

授業見学会は、戸田翔陽高校で並木博文先生、岩本太一先生に授業を担当していただき実施しました。研究委員会で今年度研究している内容の実践として実施したもので、情報A「webカメラを使ったコミュニケーションの工夫」の授業を見学しました。多数の会員に参加していただき盛況に見学会ができました。授業後の研究協議でも積極的な意見や感想が聞けて実施した意義を感じたものとなりました。

今年度の研究委員会では7名の先生方に積極的に研究をしていただきました。昨年度、新学習指導要領からみる「コミュニケーション」の工夫について研究を行い、8項目にわたる授業提案を行いました。本年は、この授業提案を研究委員の各学校の実情にあわせて実践し、他の学校でも授業実践できるようなものを探っていこうと始めたものです。詳しくは本会誌に報告がなされているので、是非お読みいただき、それぞれの勤務校で、必要な部分を取り出し上手に活用していただければと思います。

最後になりますが、本研究会は生まれて7年が経過しました。よちよち歩きから一人前にしっかり歩けるようになる充実期にさしかかっているといって良いと思います。県教育委員会をはじめ多方面の方々からいろいろと御指導、御鞭撻をいただきながら、会員相互の研究を充実させ、さらなる発展を期したいと思います。

世の中が混沌とし、何が本当で何をしたらよいか、何が必要であるか、先を見据えるには難しい状況ではありますが、生徒のための、「授業力の向上と充実」をしなければなりません。

更に、本研究会は一部のマニアだけの集団でなく、会員が積極的に参加し、意見が言え、質問ができる、参加して良かったと思える研究会に、そして、混迷する情報社会の中で苦悶する生徒に、基本的事項をきっちり身に付けさせて社会に送り出す一助となるような研究会にしていかなければと考えています。

本会の発展充実のために、会員の皆様のますますの御支援・御協力をお願いし、挨拶と致します。

【寄稿】

埼玉県高等学校情報教育研究会誌に寄せて

教育局県立学校部高校教育指導課 指導主事 荻原 康之

埼玉県高等学校情報教育研究会員の皆様には、日頃、埼玉県情報教育の充実・発展のため御支援・御協力をいただいておりますことに、深く感謝申し上げます。会誌第7号の発行に際し、僭越ですが一言寄稿させていただきます。

○教材研究の大切さ・面白さ

11月12日（金）に戸田翔陽高等学校において、岩本先生・並木先生による研究授業を拝見させていただきました。情報Aの授業で、「Webカメラを利用したコミュニケーションの工夫」という題材でした。コミュニケーションには言語的要素と非言語的要素があり、生徒に非言語的要素の重要性を理解させることを目的に、学校で準備できる機器を活用して、生徒の興味関心を引き付ける実践でございました。先日参加しました国立教育政策研究所教育課程研究センター研究指定校発表にも劣ることのない本研究会研究委員の先生方の成果ではないかと思います。

教科「情報」の指導法については、多くの試行錯誤の余地があります。また、情報技術の進展はドッグイヤーでありその技術をどのように授業に取り入れるかなど、先生方の日々の教材研究は他の教科より大変なものがあると思います。裏をかえせば、それが教科情報を教える面白みであると、私自身の実践からも感じております。

教科「情報」の授業要素には、誰が教えても変わってはいけない不変の幹となる部分と、枝葉になる部分があります。幹となる部分は、教科「情報」の授業をとおして生徒に何を教えたかということです。授業を担当する先生方は、教科「情報」で何を教えているのかという確かな考え方をもちて日頃の授業や教材研究に臨む必要があります。学習指導要領の教科目標からぶれることのない授業の幹を本研究会の活動をとおして共有いただければと思います。また、枝葉の部分は、生徒の実態や社会の動向に合わせて変わる部分です。例をあげれば、「問題解決の処理手順を教える」という幹を念頭においていれば、どのツールを用いてもツールの細かい使い方が授業の中心になることはないということです。

是非、本研究会の活動や夏の教育課程研究協議会等を活用いただき、活発な「熟議」をとおして教科「情報」の授業の在り方を考えていただければと思います。

○教科指導における情報通信技術の活用

昨年度、各県立高校にはクラス用コンピュータを41台整備しました。各校の実情に応じて、教科指導にご活用いただいていることと思います。平成22年8月に文部科学省から「教育の情報化ビジョン（骨子）」が発表されました。示された論点は、現在、さらにワーキンググループで検討され、平成22年度中に発表される予定です。方策の中には、指導者用や学習者用のデジタル教科書、1人1台の情報端末など教科指導への情報通信技術のさらなる活用が盛り込まれています。全てが実現されるとは限りませんが、学校現場への情報通信機器の導入がさらに進みます。以前に視聴覚機器として活用されていたOHPの多くは、プロジェクターに代わりました。ツールが変わっても教科指導を行なう上で、よりわりやすく生徒に教えるための授業改善が大切なことは変わりません。

情報通信技術を効果的に活用が生徒の学習意欲や集中力の向上につながることは、文部科学省委託事業「ICTを活用した指導の効果の調査」の検証授業の分析評価を参照するまでもなく、会員の先生方には実感されていることと思います。限られた授業時間で効果的に授業を進めるためのツールの一つとして情報通信技術を適切に活用することが、わかりやすく深まる授業を展開するために欠かせないものとなります。

会員の先生方には、校内の情報教育の推進役を担っていること存じますが、引き続きご自身の授業実践を、他教科の先生方にフィードバックしていただき、連携を深めていただければと思います。それらが確実に定着することにより、生徒の情報活用能力の定着、情報モラル育成にもつながります。

○結びに

新学習指導要領においても、教科「情報」は必修になりました。会員の先生方の日頃の実践の積み重ねが教科「情報」の発展につながることは確かでございます。日々、忙しい中と存じますが、授業研究に引き続き取り組まれますようお願いいたします。

最後になりましたが、埼玉県高等学校情報教育研究会、並びに会員の皆様の益々の御発展と埼玉県の情報教育の進展を祈念いたしまして、あいさつとさせていただきます。

【寄稿】

埼玉県高等学校情報教育研究会誌に寄せて

県立総合教育センター 指導主事兼所員 須藤崇夫

埼玉県高等学校情報教育研究会におかれましては、日頃より本県教育の充実・発展に格段の御尽力をいただいておりますことに、心から敬意を表します。

県立総合教育センターでは、「授業力の向上」を目指し、様々な研修に取り組んでいます。

教科「情報」についても、情報科教員を対象に、専門研修（教科「情報」スキルアップ研修会）を開講しています。この研修では、情報に関する知識・技術のスキルアップと教科指導力の向上、問題解決能力の育成などの教科目標を達成するための講義・演習・協議を行っています。

平成22年度は、A日程・B日程とも、各1日で実施しました。A日程は、コミュニケーションと教科「情報」を主なテーマに、「情報やメディアの見方・考え方」「情報とコミュニケーション」「情報モラル」について、B日程は、問題解決と教科「情報」を主なテーマに、「情報やメディアの適切な扱い方」「問題解決（学習）と情報教育」について扱い、教科指導に必要な内容の習得を目指しました。A日程・B日程とも、演習・協議の時間を確保し、授業ですぐ活用できるテーマを演習するとともに、先生方の情報交換の機会を持ちました。

平成23年度も、A日程・B日程、各1日で計画しています。A日程は、「情報とメディアの特徴」「情報通信ネットワークとコミュニケーション」「情報社会の課題と情報モラル」「情報社会における問題の解決」および情報交換を予定しています。B日程は、「情報通信ネットワーク」「情報システム」「問題解決とコンピュータの活用」「モデル化とシミュレーション」「情報の管理と問題解決」「情報モラル」および情報交換を予定しています。詳しくは、平成23年度の研修案内をご覧ください。

さて、ある全国の情報教育研修担当指導主事等を対象とした情報教育に関する調査によると、教科「情報」の役割について、「ますます重要性が高くなる」「独立教科としての役割は残っている」「必修科目として存続させるべきである」などの考えに賛同する回答が80%に達するそうです。その理由として、「言語を活用する能力を支える情報活用能力はすべての生徒に必須の力である」とか、「他教科との連携等を考える場合、その基礎教科として修得させるべき内容が教科「情報」

にある」といった、高校生の基礎的な素養として必要性をあげているようです。これらは、多くの情報教育の研修担当者が、教科「情報」の意義と必要性を強く感じていることの表れだと思います。

また、この調査では、教科「情報」の学習内容として欠かせない項目として、情報モラルが1位でした。

この情報モラルについて、先日、中央教育審議会初等中等教育分科会の先生にお話を伺うことがありました。この先生は、この分野を情報安全教育として捉えるととともに、情報安全を3つに分類してお話して下さいました。

「情報に係る安全について、情報と人間・社会に関するものとし、3つに分類して考える。①情報の本質に起因する安全情報そのものが人間や社会に与える影響から安全を取り扱うもので、情報の本質（物質との違いなど）、情報の表現や取り扱い（コミュニケーション）、信頼性や信憑性（メディアリテラシー）なども含まれる「安全な情報」を求めるもの②情報システムにかかわる安全主に情報機器やネットワークなど情報セキュリティに関するもので、「安全な情報システム」を求めるもの③情報社会の安全社会的な安全性であり、「安全な社会システム」を求めるもの」というものでした。生徒に分かりやすいアプローチだと思います。

ところで、平成23年4月に、総合教育センターの本所及び深谷支所が、行田市に統合・移転します。教員研修や調査研究などの業務を一元的に行うことによって、研修・研究等の効率的・効果的な運営体制を整え、教員の授業力向上をはじめ教員研修の充実を図ります。

埼玉県高等学校情報教育研究会におかれましては、課題を共有し、教材や指導方法を研究し、資質を向上していただくとともに、生徒が、心豊かな生活を実現できるよう積極的に御活動いただきますようお願い申し上げます。

今後の本研究会の御発展と会員の先生方の御活躍と、埼玉県の情報教育の発展に寄与されることを強く期待しております。

【総会・講演会】

平成22年度 埼玉県高等学校情報教育研究会総会・講演会報告

埼玉県立浦和北高等学校 教諭 亀井 義弘

5月26日、平成22年度の総会及び講演会が下記のように開催された。

1 日 時

平成22年5月26日（水）

午後1時30分～4時30分

2 会 場

埼玉県立大宮高等学校やまぼうし会館2F多目的室

3 総会について

（1）開会のことば

埼玉県高等学校情報教育研究会副会長

勝又 健司 埼玉県立児玉白楊高等学校教頭

（2）あいさつ

ア 埼玉県高等学校情報教育研究会会長

舘 眞一

イ 県教育局県立学校部高校教育指導課

荻原 康之指導主事（県立学校IT推進担当）

ウ 総合教育センター情報教育推進担当

須藤 崇夫 指導主事

エ 会場校

森泉 秀雄 埼玉県立大宮高等学校長

（3）総会 協議事項

ア 平成21年度事業報告について

イ 平成21年度決算について

ウ 平成22年度役員改選について

エ 平成22年度事業計画について

施設見学は、大学を予定している

オ 平成22年度予算について

新会長に矢部 秀一 埼玉県立川越女子高等学校長が就任

（4）連絡

研修会実施について



pic.1 舘 前会長



pic.2 会場風景



pic.3 矢部会長

(5) 講演会

ア 演題及び講演者

『ネットとリアルのあいだ

ー真の情報倫理をもとめて』

東京大学大学院情報学環教授 西垣 通 氏

イ 講演

急速な情報技術の進歩にともなって出現したネット社会は、便利な反面、さまざまな心のひずみをも生みだしている。リアルタイム・ネット・ゲームに耽溺して自分自身を見失ってしまう「ネットゲル人」はその好例だ。そもそも、「心／意識」とはいったい何だろうか。そこから考えていかなければ、人間が機械に支配され、情報洪水に呑みこまれていく社会的傾向には歯止めがかからなくなってしまう。本講演では、この問題ととりくむアプローチを示し、あらたな情報学を建設するための序論をのべた。

以下に、講演の流れに沿って題目を示して概観する。

1. 心が病んでいる！？

2006～8年のデータでは、精神疾患が多く自殺者も過去最多になっている。解離性人格障害が多発している。人間が機械のようにになっているのではないか。

2. 意識とは何か

3000年前に発生か？知覚意識と自我意識が区分され、自我意識は言語が支えるもので、物語的時空間として国民的意識や自分の位置づけに関わっている。

3. 二分心 (bicameral mind)

意思決定のストレスが幻聴を誘発する。二分心の成立と衰退の中で文字・文明の発生。

4. 文明の発達

神の無声と共同体の崩壊・再編、近代意識の創生

5. 歴史：組織と身体

右脳と神、左脳と文明・自我意識の関連。身体性が希薄になっている。

6. 近代的人間観とIT

言語的自己が肥大し、人が部品化数量化している。社会全体がメガマシン化するなかで、人間の部品化、身体的自己・リアルの希薄がおきている。

7. 情報の大洪水

マスコミ・インターネット・Web2.0

8. 情報は小包なのか？

生命体はautopoietic system

ノイマンからウィーナーのパラダイムへ

自分は、自己言及的で閉鎖系

9. 意味をつくるのは身体

脳科学の発展から感情の働きや意識について新たな知見が明らかになっている。

10. 情報学を問いなおす

情報は、21世紀のキー概念。

世界を情報を使って観察する存在としての生命体

11. 求められるコンピュータ

思考機械・対話機械・有機機械

有機機械をつくれるか

全体を通して、落ち着いた語り口から、実体を持つ生命と実体がないかのように見える意識を歴史的経緯を示されながら、情報を切り口に今後の方向性を示していただき極めて示唆にとんだ講演会であった。

<参考文献>

・Jaynes, J. “The Origine of Consciousness in the Brekdown of the Bycameral mind”, Houghton Muffin, NY, 1976

(柴田裕之訳『神々の沈黙ー意識の誕生と文明の興亡』、紀伊国屋書店2005

・西垣 通『統 基礎情報学』、NTT出版2008年

・西垣 通『ネットとリアルのあいだ』、ちくまプリマー新書、2009年



pic. 4

(6) 諸連絡

ア 全国大会について

8/20・21 金沢工業大学

イ 研究委員の募集

(7) 閉会の言葉

埼玉県高等学校情報教育研究会副会長

勝又 健司 埼玉県立児玉白楊高等学校教頭

【全国大会】

全国高等学校情報教育研究大会報告

埼玉県立朝霞高等学校 教諭 春日井優

はじめに

これまで東京、茨城と関東で行われていた全国高等学校情報教育研究大会は、第3回目を迎え関東を離れて石川県で開催された。これまでは1日開催であったが、遠方からの参加者が多く見込まれたため、1日目は午後から始まり2日目の昼に終わるという2日開催の形式で行われた。埼玉県からの参加者9名を含め、全国から約200名の参加者を集め、盛況のうちに終了した。

また、開会式の先だって全国高等学校情報教育研究会の総会も行われたことを併せて報告しておく。



1 大会概要

(1) 大会名称

第3回全国高等学校情報教育研究大会 石川大会

(2) 日時

平成22年8月20日(金) 13:00~17:00

開会式・基調講演・ポスターセッション

平成22年8月21日(土) 9:00~12:40

分科会・閉会式

(3) 場所

金沢工業大学

〒921-8501 石川県石川郡野々市町扇が丘7-1

(4) 目的

全国の情報教育関係者が一同に会し、講演、研究発表、協議、情報交換を通して、これからの教科「情報」の在り方や課題解決の方策を探り、実践的指導力の向上を目指す。

2 内容

(1) 大会テーマ

I C Tコンパス ―新たな風―

(2) 開会式

・開式のことば

・会長挨拶 下條 隆史会長(東京都立東村山西高等学校長)

・実行委員長挨拶 今井 和愛委員長(石川県高等学校情報教育部会長)

・来賓祝辞

・閉式のことば



(3) 基調講演

・演題 『新学習指導要領と教科「情報」 ―問い直せ！情報教育―』

・講師 文部科学省初等中等教育局視学官 永井克昇先生



国民必須の素養としての情報活用能力を、読み・書き・計算に並ぶ4番目の基礎力と位置づけた。また、教科「情報」の目標として掲げられている「情報活用の実践力・情報の科学的な理解・情報社会に参画する態度」を身につけさせる情報教育を“日本型情報教育”と命名し、この“日本型情報教育”を教科情報において確実に実践してほしいと熱く語られていた。我々情報の教員を励ます熱いメッセージが印象的だった。



(4) ポスターセッション (研究発表)

下記のようにポスターセッションが行われた。発表者と参加者の距離が近く、発表者の実践の詳細な説明を聞き、参加者からの熱心な質問をするといったやり取りが行われ、大変熱気あふれるものとなった。

- ・『パズル「数独」の解法の流れを利用したプログラミングの基礎的学習過程の構築』山下 通 (兵庫県立社高等学校)
- ・『プログラミング学習を活用した情報と数学の接続』谷川 佳隆 (千葉県立船橋豊富高等学校)
- ・『表現と内容の理解 ―Wason の 4 枚カード問題を題材に―』若林 庸夫 (神奈川県立海洋科学高等学校)
- ・『色のいろいろ ― 3 原色はベン図で見せるだけですか?』近藤 敏文 (愛知県立天白高等学校)
- ・『SNS を活用した取り組みについて』能城 茂雄 (東京都立上野高等学校)
- ・『問題解決学習におけるテキストマイニングの実践』小原 格 (東京都立町田高等学校)
- ・『国際交流を支えるネットワーク』林 道雄 (石川県立鶴来高等学校)
- ・『キャリア教育の充実を支える情報デザイン ― 校内ポスター・校内 Web・校内新聞を活用して―』五十嵐 誠 (神奈川県立横浜清陵高等学校)
- ・『つながればわかるさ! ネットワーク』田崎 丈晴 (千代田区立九段中等教育学校)
- ・『職業調べを題材にした授業の紹介』藤井 拓也 (茨城県立下妻第二高等学校)
- ・『茎崎高校における情報教育の現状と課題』寺島 栄一 (茨城県立茎崎高等学校)
- ・『効果的な教材研究』山下 裕司 (山口県立岩国高等学校)



(5) 分科会 (研究発表)

下記のように、全国の先生方より日頃の研究成果の発表があった。埼玉県からは研究委員会発表『情報機器を利用する上でのコミュニケーションの工夫』を坂本峰紹先生 (埼玉県立新座柳瀬高等学校) が行った。また、『「基礎情報学」と「情報 C」 親学問不在の呪縛からの解放と「望ましい情報社会の在り方」を考えられる生徒の育成を求めて』という表題で中島聡先生

(埼玉県立大宮武蔵野高等学校) が発表された。どちらの発表も多くの参加者を集め、積極的な質問があがるというように埼玉県からの発表に対しての関心の高さを感じられる分科会であった。

【第 1 分科会】情報モラルと問題解決

1-1 『「基礎情報学」と「情報 C」 親学問不在の呪縛からの解放と「望ましい情報社会の在り方」を考えられる生徒の育成を求めて』中島 聡 (埼玉県立大宮武蔵野高等学校)



1-2 『中国の教育から見る日本の情報教育』世良 清 (三重県立津商業高等学校)

1-3 『普通教科情報における「個人情報・プライバシー・肖像権」に関する授業実践』生田 研一郎 (中央大学杉並高等学校)

1-4 『問題解決力をつけるために』江守 恒明 (関西大学中等部・高等部)

【第 2 分科会】メディアとコミュニケーション

2-1 『マルチメディア系科目の「実技試験」と「プレゼン試験」』五十嵐 誠 (神奈川県立横浜清陵高等学校)

2-2 『Global Usability に配慮した日本語学習支援教材の制作 ― 教科情報における遠隔講義と e-Learning 学習の効果と可能性を探る』佐藤 万寿美 (兵庫県立西宮今津高等学校)

2-3 『「図書館」と「情報」 ― 高校の情報科で「図書館」を考える ―』石川 伸明 (愛知県立旭陵高等学校)

2-4 『岡山県立玉野光南高等学校における授業実践』草野 泰秀 (岡山県立玉野光南高等学校)

【第 3 分科会】情報の科学的な理解

3-1 『情報の科学的な理解を助ける自作教材や小道具』天良 和男 (東京都立日比谷高等学校)

3-2 『アルゴリズム的思考による計測・制御と問題解決学習 ― 台車型ロボット Beauto Racer を使った授業実践 ―』稲川 孝司 (大阪府立中百舌鳥高等学校)

3-3 『モデル化とシミュレーションについての実践 ― 数式モデル、ドリトルを利用した車型ロボットの制御等の実践報告 ―』野部 緑 (大阪府立桃山高等学校)

3-4 『高等学校における起業シミュレーション』広田 高雄（大阪府立今宮高等学校）

【第4分科会】研究会・専門学科の取り組み

4-1 『専門学科「情報科」の現状と専門学科「情報」の指導』滑川 敬章（千葉県立柏の葉高等学校）、『専門学科「情報科」での取り組みと問題点』綿貫 俊之（東京都立新宿山吹高等学校）

4-2 『情報機器を利用する上でのコミュニケーションの工夫』坂本 峰紹（埼玉県立新座柳瀬高等学校）



4-3 『大阪私学教育情報化研究会の取り組み』米田 謙三（大阪羽衣学園高等学校）

4-4 『メディア・リテラシー教育用教材の開発 ―教科「情報」での活用を目指して―』岡本 恭介（学校法人朴沢学園明成高等学校）

（6）閉会式

・開式のことば
・分科会報告
・学習環境についての提案 『情報の授業における生徒のニーズ ―情報の授業の在り方について―』藤岡 良一（群馬県立万場高等学校）

・会長挨拶 下條 隆史会長（東京都立東村山西高等学校長）



・次期開催都道府県より
・閉式のことば

3 次期開催について

閉会式において、下記の通り次期の開催について案内があった。

日程 平成23年8月5日（金）・6日（土）

場所 大阪経済大学（〒533-8533 大阪府大阪市東淀川区大隅 2-2-8）

次期の開催地も埼玉県からは離れているが積極的に参加していただければ幸いである。

おわりに

これまでに行われた3回の大会の様子や発表内容などが以下のサイトにまとめられているので、参考にさせていただきたい。

全国高等学校情報教育研究会

<http://www.zenkojoken.jp/>



【施設見学】

平成 22 年度埼玉県高等学校情報教育研究会施設見学会報告

専修大学 ネットワーク情報学部 生田キャンパス

埼玉県立草加西高等学校 教諭 田口 義弘

はじめに

埼玉県高等学校情報教育研究会施設見学会が、専修大学ネットワーク情報学部（生田校舎）において開催された。その概要を報告する。

1 専修大学およびネットワーク情報学部の歴史

専修大学は、日本初の経済学と法学の専修学校として、1880年に創立された。

専修大学 21 世紀ビジョンとして、「社会知性

(Socio-Intelligence) の開発」を掲げる。

ネットワーク情報学部（平成 22 年度各学年定員 230 名）は、2001 年に開設された。2009 年からは情報学を共通基礎としながら、8 つの目的別専門プログラムから複数のプログラムを選択して、履修することができる。幅広い領域から、自分にあったものを選ぶことができる。

教職課程では、「数学」と「情報」の免許を取得できる。

2 次第

- 1 日時 平成 22 年 8 月 24 日（火）
午後 1 時 30 分～4 時 30 分
- 2 会場 専修大学生田校舎 9 号館 7 階
ネットワーク情報学部
- 3 内容 ・あいさつ
(1) ネットワーク情報学部
カリキュラム説明
ネットワーク情報学部教授



生田校舎 9 号館 120 年記念館

江原 淳 先生

- (2) ネットワーク情報学部における
デザイン教育の事例

ネットワーク情報学部准教授

上平 崇仁 先生

- (3) 情報の教員養成について

ネットワーク情報学部講師

望月 敏男 先生

- (4) 施設見学 情報科学センター他

- (5) 学生による模擬授業

およびディスカッション

(ア) 4 年 Y 君

(イ) 4 年 K 君

(ウ) ディスカッション

・閉会（あいさつ・その他）

3 内容

- (1) ネットワーク情報学部カリキュラム説明



江原 淳 先生

教授 江原 淳 先生

本学科では、Missionとして「未来の情報社会を切り開いていく（まだないものを作る）人材の育成、高度なITを人間や社会のために活用（まだない使い方）できる人材の育成」としている。

また「自分で～する」という態度育成のため、少人数制の演習を行っている。

1年次に、情報表現演習、情報分析演習、プログラミング演習の必修演習を、2年次には3つの基礎演習と8つの応用演習、3年次にはプロジェクト、4年次に卒業演習と、各学年にコアとなる演習科目を設置している。

学生は、次の8つの目的別専門プログラムから、自ら4年間の学びをデザインする。

()内は将来の進路

- a. コンテンツデザインプログラム
(Webデザイナー・ディレクターなど)
- b. メディアプロデュースプログラム
(コンテンツ産業の企画職など)
- c. ネットワークシステムプログラム
(SEなどの情報処理技術者など)
- d. ユビキタスシステムプログラム
(組込機器などの技術企画職など)
- e. 経営情報分析プログラム
(データ分析のできるSE、経営企画など)
- f. ITビジネスプログラム
(経営コンサルタントや経営者など)
- g. 社会情報プログラム
(ネット上のコミュニケーション、教育でのIT活用、地域の情報化を支援する人材など)
- h. 情報数理プログラム
(理工・情報系大学院進学、中学や高校の教員など)

学習の特徴として、

- ・コミュニケーション
(相手にわかるように伝える)
- ・ソリューション
(問題を把握し、その解決を図る)、
- ・アクション
(自分から行動する)

そのため、グループワークを通じた学習課題に取り組むことで力をつけるように指導している。

3年次から修了するので、2年次までにプログラムを検討変更できる。実際には、科目選択において科目を指定しているものがあるため、プログラムが限定される。そのため最大2つのプログラムから選択する。

1年次の専門科目のプログラミング入門やプログラミング演習では「ひとつを極めれば、あとは方言みたいなもの」をモットーに、プログラム言語はC言語を必修としている。単位を落とす生徒も少なくないが、厳しくやっている。

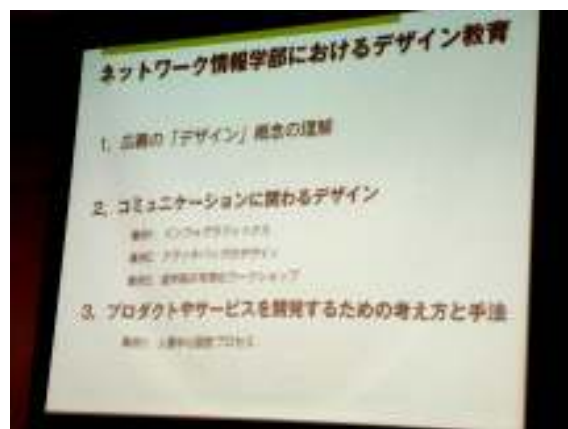
(2) 「デザイン教育の事例」

准教授 上平 崇仁 先生



上平 崇仁 先生

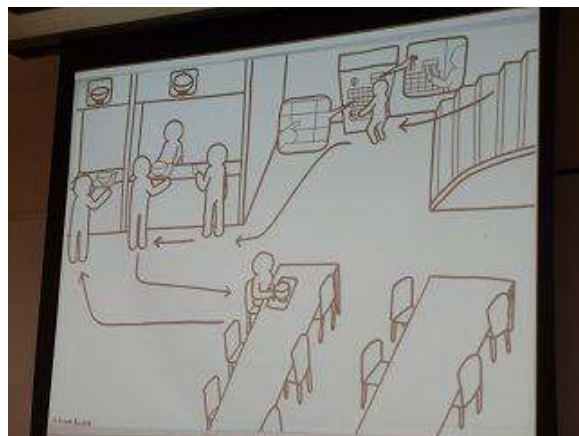
広義の「デザイン」概念の理解、コミュニケーションに関わるデザイン、プロダクトやサービスを開発するための考え方、などのデザイン教育は情報教育においても十分可能であ



り、その社会的な有用性は増しつつある。

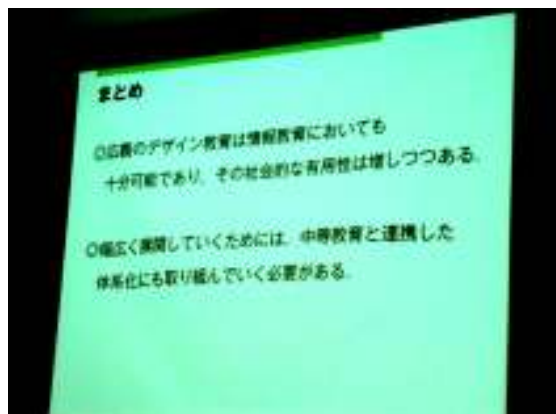
幅広く展開していくためには、中等教育と連携した体系化にも取り組んでいく必要がある。

学生に身につけてもらうために、班を作り、演習とその発



表を行っている。

その事例として、異なる言語圏の人（学生）に学食利用の非言語表現をテーマとした演習などの様子を紹介。



(3) 「情報科教育論」の指導について

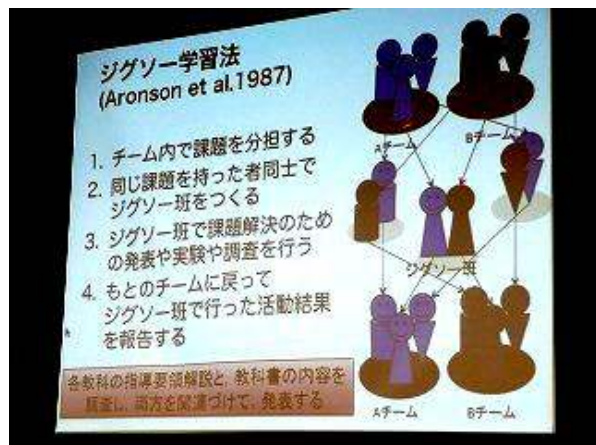
講師 望月 敏男 先生

NHK教育の「高校講座 情報A」を担当も経験された。



望月 敏男 先生

学生の高校での「情報」の履修状況を踏まえ、情報科の教科指導で重視すべきこととして、「情報活用の実践力」、

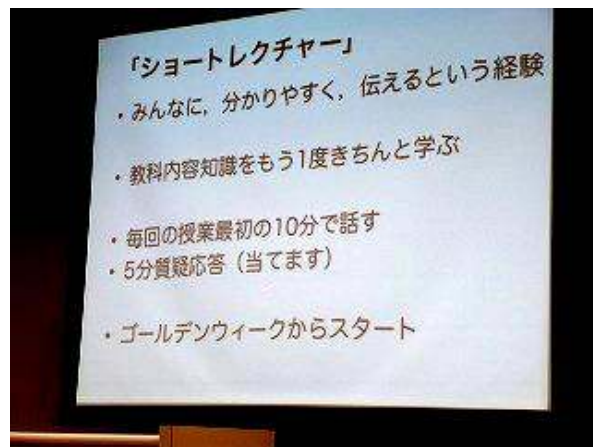


「情報社会に参画する態度」、「情報の科学的な理解」をあげた。

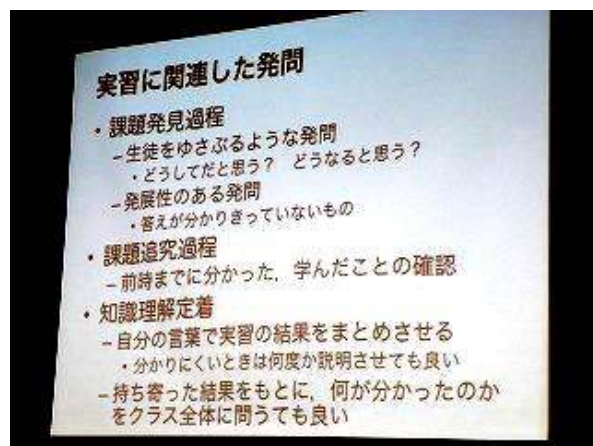
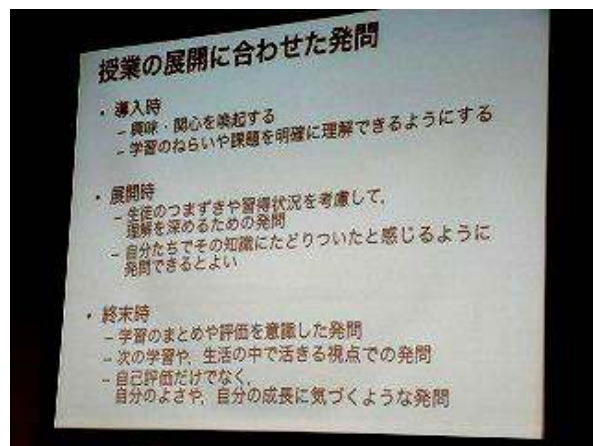
また教育実習事前指導のデザインとして

「“学習者が主体的に学習を行う学び方”を学び取る」
(ジグソー学習法と情報科教育論での導入)

「内容知識を高めるためのショートレクチャー」



「(授業や演習での) 発問の重視」



「ICTを活用した授業の体験」を提案し、今後の課題として、授業時間だけでは十分な教授技能を体得する機会をつくることできないことや、教材研究の追究をあげた。

(4) 施設見学：「情報科学センター」

受付がある9号館4階のフロアに案内された。コンピュータの利用できる部屋は数多く分散している。



最初に導入されたシステムなど

前身は、昭和37年1月(1962.1)に経営学部開設のために設置された電子計算室で、以来常に先端システムを導入している。

「IT技術をまず提供すること」を念頭に、学生に教育・研究目的でのインターネット、メール、レポート作成などのICTサービスを提供している。また学内での無線LANのサービスも提供している。



夏季休業中の端末室の様子

生田校舎と神田校舎、(付属高校4校を含む)の33の実習室、2000台のPC、2万人のアカウントを管理・統括している。

(5) 学生による模擬授業およびディスカッション

4年生による、教育実習の際の模擬授業(情報C)を再現(10分)

埼玉出身のK君による、インターネットによるデータ通信についての授業。パケット料金の話題から、生徒にそれらを身近なこととして理解させた。

神奈川出身のY君は、黒板の前で実物のレコードから携帯音楽プレーヤーまで次々と取り出し、黒板の栈(さん)に置いて、その進歩を提示した。そして、生徒にその楽曲の入手方法の発問を行い、メディアとしての変化を考えさせた。

4 おわりに

この施設見学会では、開学以来の経済と法律という人とかかわりを学問としてきた文系の専修大学の、ネットワーク情報科学部を通じての情報学への取り組みの本気さが伝わってきた。専修大学の取り組みは、同様の学部を開設した他の大学や理系学部も、参考になると考える。

人間関係を苦手とする若者が多い今日において、演習や実習をあえてグループワークを作り学習課題に取り組みさせることで力をつけさせる実践は、指導や評価の難しさを知る我々教員も深くうなずくものである。

卒業生は、情報分野の進路でなくても、この学部で学んだことを活かせるものを身に付けて社会で活躍できると考える。この大学や学部で学べる学生は大変恵まれていると思う。

専修大学の江原先生、上平先生、望月先生、模擬授業をしていただいた4年生のお二人、情報科学センターのスタッフの皆さんにこの場を借りてお礼を申し上げ、感謝の意を表したい。

5 参考文献

- (1) School of Network and Information 2011
- (2) 2010年度 ネットワーク情報学部時間割
- (3) 平成21年度 専修大学 資格課程年報
- (4) Information Science Center2010

情報科学センターパンフレット

【授業見学会】

平成22年度埼玉県高等学校情報教育研究会第1回授業見学会報告

埼玉県立川越西高等学校 教諭 曾田 正彦

はじめに

平成22年度の埼玉県高等学校情報教育研究会、第1回授業見学会及び意見交換会の概要を報告する。

1. 概要

ア) 日時・場所

平成22年11月12日(金) 午後 13:00～16:40
埼玉県立戸田翔陽高等学校
4F会議室(開会行事、意見交換会、閉会行事)
3Fコンピュータ室(授業)

イ) 授業担当者

埼玉県立戸田翔陽高等学校 並木 博文 教諭
岩本 太一 教諭

ウ) 参加者 28名

エ) 次第

受付(12:30～)

1 開会行事(13:00～)

(1)開会のことば

(2)あいさつ

埼玉県高等学校情報教育研究会

矢部 秀一(川越女子高等学校) 会長

埼玉県教育委員会

荻原 康之指導主事

会場校

菅野 吉雄 校長

(3)授業の概要説明

岩本 太一 教諭

(4)諸連絡等

2 授業見学(13:20～14:05)

埼玉県立戸田翔陽高等学校 岩本 太一 教諭

情報 A 「web カメラを使ったコミュニケーションの工夫」
(休憩)

3 授業担当者より・授業についての研究協議(14:25～15:45)

(1)授業者からの報告

(2)質疑応答

(3)授業に関する意見交換会

4 各校の課題についての意見交換会(16:00～16:20)

事前に配布された質問票をもとに質疑応答や意見交換が行われた。

5 閉会行事 16:20～

(1)指導講評

埼玉県教育委員会

小川 剛 指導主事

(2)あいさつ

矢部会長

(3)事務連絡

事務局 鈴木

(4)閉会のことば

2. 授業の様子

チャイムが鳴る前にほとんどの生徒が着席していた。並木教諭より服装・携帯電話の指導から授業が開始された。本時の目的は単純明快で、コミュニケーションについて学ぶということであった。

まずは、機器の説明から。Webカメラ、ヘッドセットについて説明があり、コンピュータへの接続を行った。生徒は一応に岩本教諭に耳を傾け、センターモニターを見ながら設定をしているさまが印象的であった。コンピュータは事前にログインしており、skypeについても、岩本教諭が事前に取得していたアカウントを配布し、生徒はその与えられたアカウントでログインをした。多少の戸惑いや混乱も見られたが大勢に影響は無く、続いて、本番のskype接続となった。



ヘッドセットとwebカメラの説明を受ける生徒

3人程度のグループが決まっており、そのメンバー間でコミュニケーションを取ってみる。最初のうち、接続できなかったり、接続で音声や映像が流れてこなかったり、といった支障もみられたが、次第に無くなり会話が始まっていった。最初は緊張気味で誰から話し始めるか、身構えているところも見受けられたが、自然と誰かが口を開いていた。というのも、会話の内容は事前にキーワードが用意されており、「朝食を食べた?」「昨日どんなテレビ見た?」「テストはどうだった?」といった差しさわりの無いもので、どのような相手とも話せるように配慮されていたからだ。10分程度、その会話のやり取りが実践され、少しずつ慣れてきたのか、テーマ以外の会話も聞かれるようになってきた。Skypeの実践が終わり、最後にまとめの時間になった。

生徒は配布されたワークシートに気づいたことや伝えづら

かったことを記入していく。そして、コミュニケーションを円滑に行う重要な要素について岩本教諭より説明があった。コミュニケーションは言語で伝えているバーバルよりも仕草や声のトーンといったノンバーバルで伝える情報の方が大きい。



skype接続でグループの会話が始まる

普段、会話をしているときにそのようなことを意識している生徒は少ないだろう。人の話を聞くときに、相手に体をしっかりと向け、相手を見て、真剣な目で聞く。そういった姿勢が相手に好感を与え、良い印象をもたらすのではないか。といった結論であった。岩本教諭のこのまとめの通り、生徒はメモを取りながらも、懸命に岩本教諭の話に耳を傾け、体で話を聞いていたように見えた。

3. 授業者からの説明

研究授業後に、授業者である岩本先生から授業の概要などについて説明があった。

- 教材として、Web カメラを使用した Skype を利用した。Web カメラ・Skype はともに、生徒にとっては、あまりなじみのない教材を使った授業ということで、興味・関心を引く内容と考える。
- 本授業は本校3年次に設定されている必修科目・情報Aの講座内で行った。高校3年生でも対人コミュニケーションを不得意とする生徒が多い。そのため、携帯電話を使ったプロフィールサイトやEメールといった文字だけのコミュニケーションでよく起こっているトラブルのほかに、日常会話でもコミュニケーションがうまくいっていない経験も多く、その失敗の要因を見つけられたらと思い、考案した。
- .題材を通して、コミュニケーションを円滑に行う要素が、音声や文字などといった言語的(バーバル)の他に、非言語的(ノンバーバル)内容も重要であることを気づかせ、普段のコミュニケーションの場でもそれらの要素を意識して、学校生活を送ることができるように指導したい。

4. 授業についての研究協議会

その後、授業に関する質疑応答が行われた。以下、その

要約を示す。

Q 鉛筆・消しゴムを禁止にしていたのはなぜか？

A 鉛筆の心や消しカスがキーボードに挟まることがあるので、それによる故障を防ぐため禁止にしている。

Q 一部で映像が遅れたり、音が遠かったりがあった。今日の人数や機器の状態を考えた上でトラフィックは予定通りだったか？

A 多くは予定通り。事前のテストでうまくいっていたので不安はそれほど無かった。今日も大きな問題は無かったと思う。また、外部とのやり取りについてもテスト済みで今後は内部にとどまらず、外部との交流ができればよいと考える。(他の先生からも、外部との可能性について質問回答があった。十分に可能であり、海外とのやり取りも時差の問題を除けばできるとのことであった)

Q 今後の展開は？

A 今回は単発の授業だったため、1時間のみの授業である。教科書では「情報伝達の工夫(第一学習社 第一章 第二節)」とリンクしているので、そこで取り入れることも考えられる。

Q グループを1対1ではなく3人にしたのはなぜか？

A 1対1では恥ずかしがってお互いが黙ってしまう可能性があるため。

5. 各校の課題についての意見交換会

その後、今日の授業にとらわれず、各校の現状を踏まえた意見交換会が行われた。以下、その要約を示す。

Q コミュニケーション能力を高めるのはとても難しい。どのような工夫をされているか？

A 絵や図を言葉で表現させてみる。面接や発表をたくさんさせてみる。インストラクション(説明書)等を作らせて何を伝え、何を伝えるべきでないのかを考えさせる。

A とにかくプレゼンテーション、人前で話す機会を増やしていくこと。

A 教科「情報」だけの問題ではない。国語や社会など多くの教科で高めていくべき能力であり、すべて抱え込む必要は無い。

Q 情報の教員が1人の場合、誰に相談したらよいのか？

A 研究会への参加や、他校の授業を見学するなど、積極的に行動する。

情報科の教員が各学校に1人、または、自分以外は非常勤の先生のみというのが現状。しかし、自由に授業が進められるなどのメリットもある。

Q 実際にトラブルがあった場合、情報科教員としてどう対処するのか？

A 大きな問題については、学校単位で対応する必要がある。情報科教員としては、常に新しいものを追い続けなければいけない。プロフやフェイスブックなど新しいサービスはまず自分で体験してみることで、利点や危険性を把握しておくといよい。

Q プレゼンテーションの指導が難しい。どのように指導しているか？

A 言葉だけの情報から図を描かせるなど、言葉だけで伝える訓練をさせる。発表時は、ビデオを撮ることで、自分の発表を確認させる。また、聞き手に評価・感想をもらい、客観的な意見を聞けるといい。その際は、傷つけるような言葉が含まれていないか、感想を教員があらかじめチェックしておくことが必要。原稿を読んでしまうような生徒が多いが、とにかく場数をふむこと。また、クラス内だけでなく、保護者の前で発表するなどの機会を設けてみるてもよい。



戸田翔陽高校 岩本 太一教諭

おわりに

進路について思い悩み、決まった者は遅刻や欠席が増える3年生のこの時期に、授業見学会を快く引き受けていただいた岩本教諭、並木教諭、会場を提供していただいた戸田翔陽高校の菅野校長はじめ職員の皆様に感謝申し上げます。

数年前に新校となり、三部制となった戸田翔陽高校の生徒はどのような生徒で、また岩本教諭がその生徒に対してどのような工夫を持って授業に取り組んでいるのか、非常に興味深く見させてもらった。また、skypeについても実践事例は少なく、接続可能かどうか、できるならばその上限人数はどの程度か、授業のどの単元でどのように実践していくのか、考える良い機会となった。

また、意見交換会においてもコミュニケーション能力を高める実践事例を多くの先生方に紹介いただき、有意義な時間を過ごすことができた。

最後に参加者からの感想をいくつか紹介させていただく。

- ・ 岩本先生の人柄が良く出ていて生徒のペースに合わせて和やかに授業されているのが、印象に残った授業だった。
- ・ skypeを使った授業をはじめて見学させていただき、非常に参考になった。また、生徒も興味深く意欲的に取り組んでいたのが印象的だった。
- ・ コミュニケーションを改めて考え直すことができたきっかけの授業となった。生徒からもつないで話したいという欲求を感じました。



なお、授業で利用されたwebカメラは本研究会で購入した。貸し出し可となるので、利用されたい学校は、研究会のほうにその旨打診していただきたい。ヘッドセットも今年度購入予定であり、詳細は本研究会HPに掲載する予定である。

【研究委員会】

コミュニケーション能力の向上を目的とした授業の工夫

埼玉県高等学校情報教育研究会 研究委員

はじめに

埼玉県高等学校情報教育研究会の研究委員は、毎年研究論文を会誌へ掲載しているが、昨年「情報機器（情報通信ネットワーク）を利用する上でのコミュニケーションの工夫」と題して、新学習指導要領からみる「コミュニケーション」の工夫について研究を行った。この研究論文では8項目にわたって授業提案を行っており、コミュニケーション能力の育成をどのように授業で展開できるかを提示した。

昨年度の研究では、以下の8項目について授業提案を行っている。

- ・ プロフとエントリーシートの比較
- ・ まずは発言（投稿）する—twitterを活用した実践
- ・ Webカメラを使ったコミュニケーションの工夫
- ・ 掲示板を使用した議論
- ・ 同じ資料でプレゼンテーション
- ・ プレゼンテーション ～先生になろう～
- ・ プレゼンテーション～卒業旅行を計画しよう～
- ・ グループワークによるプレゼンテーションから学ぶコミュニケーション

前半の4項目は、情報通信ネットワークを活用するうえで必要なコミュニケーションの技術を学ぶための授業提案である。twitterやWebカメラなど、新しい技術を授業に取り入れることで、コミュニケーション能力の向上だけではなく、今後の情報化社会の進展を学ぶことへもつながると考えている。

後半の4項目は、同じプレゼンテーションというテーマで、違った切り口からコミュニケーションの能力の向上を学ぶことを提案している。

しかし、これらは授業提案であり、授業実践として蓄積されたものではなかった。そのため、本年の研究では、昨年の授業提案を各研究委員の勤務校で実践し、その成果から、新たに各校で実施できるようなエッセンスを見つけることができないかと考えた。

本年の研究では、これらの中から3つの項目について実践を行った。

実践を行ったのは、以下の項目である。

3-1 プロフとエントリーシートの比較

3-2 Webカメラを使ったコミュニケーションの工夫

3-3 同じ資料でプレゼンテーション

実践は、同じ授業提案を複数の研究委員が各勤務校で実践している。そのため、同じ授業提案であっても、各校の実情に合わせて実践が変わっている。また実施する教員によって工夫する箇所が変わっており、その違いを比較検討することで、より効果的な授業の展開について新たな発見ができると感じている。

1 学習指導要領における「コミュニケーション」の扱いについて

平成20年1月の中央教育審議会答申では、情報科の改善の基本方針や主な改善事項として『「社会と情報」については、情報が現代社会に及ぼす影響を理解させるとともに、情報機器等を効果的に活用したコミュニケーション能力や情報の創造力・発信力等を養うなど、情報化の進む社会に積極的に参画することができる能力・態度を育てることに重点を置く。』と示され、この答申に基づき、平成21年に3月に告示された「新学習指導要領」では、現行の「情報A」「情報B」「情報C」を、主として情報社会に参画する態度を重視する「社会と情報」と、情報の科学的な理解を重視する「情報の科学」の2科目に再編することになった。

新学習指導要領では、「社会と情報」の目標に『情報の特徴と情報化が社会に及ぼす影響を理解させ、情報機器や情報通信ネットワークなどを適切に活用して情報を収集、処理、表現するとともに効果的にコミュニケーションを行う能力を養い、情報社会に積極的に参画する態度を育てる』とあり、コミュニケーション能力を養うことが示されている。また目標に対応して、「内容とその取扱い」では「(2) 情報通信ネットワークと

コミュニケーション」に「ア コミュニケーション手段の発達」と「ウ 情報通信ネットワークの活用とコミュニケーション」の2つの項目が作られている。

現行の情報Cと比較すると、情報Cでは目標として『情報のデジタル化や情報通信ネットワークの特性を理解させ、表現やコミュニケーションにおいてコンピュータなどを効果的に活用する能力を養う』として示されているが、ここで出されている「コミュニケーション」は、コミュニケーションの目的によって情報通信の手段を変えることを説明するものであり、あくまで情報通信ネットワークを主として説明するためのものであった。

しかし、新学習指導要領で示されている「コミュニケーション」では、現行のように情報通信手段を活用しながらも、よりコミュニケーションの成立を主題として学習することを含むようになった。これについては、平成22年1月の高等学校学習指導要領解説において次のような記述がある。

「情報通信ネットワークを活用したコミュニケーションの問題点を、対面によるコミュニケーションと対比させながら、通信サービスの特徴を踏まえて考えさせる。また、今後も情報通信技術の進展や通信サービスの変化により、コミュニケーションが変化していくことを考えさせる。例えば、1対多などのコミュニケーションは、テレビや新聞などから電子掲示板やSNS（Social Networking Service）などまで広がってきたこと、情報通信技術の進展により個人識別による1対1のコミュニケーションが重視されるようになってきていることなどについて考えさせる。」

「情報通信ネットワークの仕組みや特性を理解した上で、実習を中心に、適切な例題を通して、目的や場面に応じて適切なコミュニケーション手段を選択し、効果的にコミュニケーションを行うために必要な基礎的な知識と技能を習得させる。その際、伝聞や推測、自分の考えが事実として伝わったりしていないか、他人の著作権などを侵害しないように適切な引用をしているかなど、情報の信憑性や著作権への配慮など、情報を発信するための様々な活動について自己評価させる活動を取り入れる。」

以上のような、コミュニケーションの扱いの変化を踏まえて、授業の中で、コミュニケーション能力の向上を行うためにはどのような内容が有効なのか、授業の提案と実践を行うこととした。

2 研究の進め方について

新学習指導要領におけるコミュニケーションの扱いの変化を踏まえた上で、このコミュニケーションの工夫をいかに指導するか、研究を行った。

前述したように、昨年の研究で授業提案を行っており、本年は、その授業提案の中からいくつかの項目を取り上げて実践を行っている。実践を行う際には、同じテーマを複数の研究委員で実践しているため、各委員の勤務校の実情に沿った実践となっている。

これらの実践を通して、情報科の授業の中で、情報通信機器を活用しコミュニケーションの工夫を指導するために有効な授業とは何かについて研究した。

授業実践は、以下の順に分けて説明している。題材設定の理由と題材の目標については、同じ授業内容の場合、理由と目標が共通のため冒頭の実践にのみ掲載している。

題材設定の理由では、どのようなコミュニケーション能力をこの題材で身につけさせたいかを挙げている。

題材の目標では、この題材を学ぶことによって得ることが期待されるコミュニケーションの知識と技能について挙げている。

それ以外の項目については、実践報告ごとに掲載している。

（1）授業を行ったクラスの概要

生徒の年次や人数、学習の状況など、クラスの状況について挙げている。

（2）ねらい

授業提案の目標をふまえて、生徒に学習の定着を期待する内容を挙げている。

（3）教材の説明

授業で使用したプリントやデータを挙げている。

（4）実施の流れと留意点

授業の展開を示したものである。50分1時間として計算している。指導者や各校の実情にあわせて、弾力的に進度をかえて実施してもらいたい。また、実施にあたって、留意が必要な内容もこの項目に掲載している。

（5）評価

授業を実践し生徒を評価する際に、評価した対象と観点を挙げている。各校の実情によって、評価方法は変化するので、授業を実践する場合は、本研究の評価方法を踏まえた上で、新たな評価方法を考えてもらいたい。

（6）ふりかえり

授業を実施した後に授業者が、生徒の状況や実施して有効だったこと、または改善を必要とすることをふりかえり挙げている。

3 授業実践報告

3-1 プロフとエントリーシートの比較

○題材設定の理由

子供たちにとって、情報通信機器を利用する身近なコミュニケーションの一つに、「プロフ」が挙げられる。

（プロフとは、携帯電話等で自分のプロフィールを作成してWeb上に公開するサービスの略称である。）

プロフに個人情報載せることの危険性を理解させる指導も重要であるが、それだけでプロフの利用がなくなることは無い。また、書き込みがいじめなどのトラブルにつながる事例も増加している。

子供たちがプロフを安全に利用するためには、プロフを何のために利用するのかあらためて考えさせ、よりよく利用するための工夫をさせる指導も必要である。

就職活動で利用するエントリーシートは“情報通信ネットワークを利用した自己PR”が目的であるが、プロフも同様に捉えることができる。しかし、PRする相手や、目的が違うため、伝える内容や表現方法が大きく異なる。

この違いを理解することで、情報を伝える際の表現方法に目を向けさせ、コミュニケーションの工夫が大切であることを理解させたい。

○題材の目標

プロフとエントリーシートは、どちらも「情報通信ネットワークを利用して行う自己紹介（個人の情報発信）」という共通点を持つが、その利用において

ア．目的

イ．伝える相手

ウ．発信する情報の内容

エ．表現

オ．相手の受け取り方

が異なることを教材の比較を通して理解させる。

以上からプロフに個人情報を掲載することの危険性に改めて触れるとともに、利用する目的を考えさせ、より適切な情報発信をするための工夫を考えさせる。

また、エントリーシートや履歴書を作成する時の留意点を理解するとともに、効果的な自己PRをするための工夫を考えさせる。

○実践の比較

実践aは1年生を対象に実施している。プロフを禁止している学校のため、指導が難しい部分もあったが、プロフとエントリーシートの違いだけでなく、プロフの危険性を強く意識させることができている。実際に使われているプロフやエントリーシートを教材にしており、生徒が具体的にイメージしやすいようになっている。

実践bは就職希望者の多い3年生を対象に、少人数の選択授業で実施している。生徒が1年生に比べ落ち着き、進路意識が高まっているため、進路指導に繋がるようエントリーシートの書き方に時間をかけている。

授業公開を行っており、授業の様子が細かく分析されている。

実践cは進学希望者が多数を占める3年生を対象に実施している。現状はプロフよりSNSを利用する生徒が多く、今後はプロフに限定せずに教材を選択することが改善案として挙げられた。2時間で実施したが、後日エントリーシートの作成部分を短縮し、他のクラスで1時間でも実施している。

同じ授業提案であっても、生徒の能力・学年・進路希望等の条件によって、実践内容は異なり、各教員の工夫も様々であることがわかる。それぞれの結果を振り返り、比較することで、新たな発見があり、今後の授業で役立てることができると感じた。

実践a（1時間で実施）

（1）授業を行ったクラスの概要

情報Aの時間内で実践した。対象とする生徒は、1学年32名（男子14名、女子18名）。多くの生徒が勉強に苦手意識をもち、高校生活の目的を見いだせないでいる。授業中、落ち着いて学習に取り組むことが難しい生徒もいる。進路学習においても真剣に前向きに取り組めない傾向にある。

プロフについては4月の入学時にアンケート調査をしている。ただし、学校ではプロフを禁止しているので、必ずしも正直には答えていない。

<アンケート>

1. プロフを作っている	7人
作っていない	25人
2. 他の人のプロフを見る	13人
見ない	19人
3. 1日のメールの発信数	平均60通
4. 1カ月の平均携帯使用料	9,665円

（2）ねらい

ア プロフとエントリーシートを比較することで、情報発信する際には、目的・相手により適した表現方法を選択することの重要性を理解させる。また、その効果についても考えさせる。さらに、プロフに関しては、個人情報を掲載することの危険性について考えさせる。

イ エントリーシートの表現方法を知ることにより、高校を卒業するまでに身につけなければならないスキルについてイメージを持たせる。

ウ エントリーシートを通して、日頃の生徒指導の意義について気付かせる。本来進路選択が迫られる3年時

に行うのが望ましいのかもしれないが、あえて1年生に行うことで効果が得られるのではと考える。

(3) 教材の説明

ア プロフ例 (画像)

前の時間、生徒に教材として使いたい旨を説明し、承諾を得られた生徒のプロフを使用した。エントリーシートとの対比をしたとき特徴が分かりやすい構図の写真を選んだ。(人数・髪型・ポーズなど。)



イ エントリーシート (画像)

事前に大学生のエントリーシートを本人の承諾を得て借りた。



ウ 比較シート (プリント)

プロフとエントリーシートの比較 I

1 年 組 番 氏名		
	プロフ	エントリーシート
①目的		
②相手		
③内容		
④表現		
⑤成果		

エ. 振り返りシート

プロフとエントリーシートの比較 II	
1 年 組 番 氏名	
●プロフについて、改めてもう一度考えてみよう	
何のために利用しているの？	
目的にあった公開をしているだろうか？	
目的は達成できたのか？	
危険性はないかな？	
相手にどんな印象を与えているのかな？	
●個人情報発信する際に気をつけなければならないことはどんなことだろう	
・	
・	
・	
●今回の授業の感想	

(4) 実施の流れ

ア プロフの利用状況を質問

・プロフの便利さ、不便さ、利用する理由利用しない理由、興味のあるなしについて

イ 用語の解説 (プロフの画像を表示)

ウ エントリーシートの説明

- ・今時の就職活動
- ・履歴書との違い

エ 比較 (プリントに記入)

- ・何のために利用するのか
- ・伝えたい相手はどんな人か
- ・伝える内容は何か
- ・どんな表現をしているか
- ・どんな効果があるのか

オ プロフについて整理する

- ・目的は何か
- ・危険性はないか
- ・どんな印象を与えているか

カ まとめ (プリントに記入)

・個人情報発信する際に気をつけなければならないこと

キ 振り返り (プリントに記入)

- ・今回の実習で学んだこと
- ・これからのプロフの使い方を考える
- ・2年後にエントリーシートが書けるようになるには何が必要かを考える

(5) 授業において留意したこと

・プライバシーに配慮し、生徒の個人情報の扱いには十分注意した。
・なるべく具体的なイメージを生徒に持たせるために、プロフもエントリーシートも本物 (実際に使われているもの) を用意し、画像を見せた。

（６）評価

ア 比較シート（プリント）および振り返りシート
プロフとエントリーシートの違いや、情報発信の振り返りについて、十分な記述があるかを３段階で評価した。

イ 授業への取り組み

授業中の態度や、発言の様子を評価した。

（７）振り返り

ア 生徒の感想（原文のまま）

- ・プロフやる時は気をつけようと思う。
- ・プロフは自分の事をネット上に公開して、すべての人がみれるけど、エントリーシートは会社の中でしか見れない。プロフとエントリーシートは２つとも自分の自己PRしてるけど、言葉使いや、趣味などがちがう。
- ・プロフとエントリーシートは同じ個人情報を書いたものでも、書き方が違ったり目的が違ったりで全然違う。
- ・プロフとエントリーシートでは大きな違いがあるということが分かった。表現やことばづかいが大きく違うこともわかった。
- ・プロフというものがどういうものか分かった。
- ・個人情報を出すときは気をつけようと思います。
- ・別に悪いこと書いてなければいいじゃんと思った。
- ・自分の情報を書き込んでいいものなのかなどちゃんと考えるべきだなと思いました。
- ・個人情報の大切さを知りました。
- ・同じ自分の情報を公開するものでも、こんなに違うんだと思った。エントリーシート書くの大変そう。たくさん勉強しないとかけないと思った。
- ・プロフの意味がよくわかった。
- ・気をつけなきゃいけないと思いました。よくわからないからやめようと思いました。
- ・プロフは個人情報を簡単に書いたりしない（みんながみるから）。エントリーシートとプロフはかなり違いがあってエントリーシートは個人情報が漏れなく安全でやるかちもあるけど、プロフは危険がたくさんで個人情報ももれやすいからあぶない。
- ・プロフとエントリーシートは全然ちがうことがわかった。写真も全然違う。いつも服装指導はうざいと思っていたけど意味があるんだと思いました。
- ・ネットはこわいなあとおもいました。
- ・エントリーシートは中学の時に書いたのと違ってさらに難しいなと思いました。特に志望理由とかからちゃんと目的をもって書かなくちゃいけないので大変だなと思いました。
- ・プロフをやる意味を考えたことがなかったので、今回のこの授業を通して、もう一回作り直そうと思った。エントリーシートとプロフの違いはすごく大きかった

です。どっちも個人情報を書くけど、相手のとらえ方が全然違うんだなと思った。

イ 授業を行って有効だった点

- ・何も考えずにプロフを利用していた生徒たちが、情報発信に当たり、相手や目的によって表現や内容を考えなければならないことを自覚したこと。
- ・友人だけでなく、誰にでも見られていると（「個人情報を掲載することの危険性」）改めて実感したこと。

ウ 改善を必要とする点

- ・プロフとエントリーシートの比較にとどまらず、情報発信という視点から、プライバシーや、情報モラル、著作権とつなげて授業を計画していく必要がある。
- ・特に本校の生徒のプロフには友人と一緒にプリクラが貼ってあることも多い。さまざまな問題をこの具体的な教材を例にして取り上げていけると生徒の興味関心意欲も高まると考える。

実践b（２時間で実施）

（１）授業を行ったクラスの概要

対象とする生徒は、３学年情報と表現履修者12名。
1・2年次にプロフの問題について学習済みである。
半数以上が卒業後の進路は就職を希望している。
就職活動が始まり、進路意識が高まっている2学期半ばに実施した。

（２）ねらい

プロフによる情報発信については、生徒指導の観点から、さまざまな問題行動について注意喚起する。
エントリーシートの作成については、進路指導の観点から、より良い自己PRについての指導を行う。

（３）教材の説明

ア プロフ例（画像）



イ エントリーシート例（画像）

オ エントリーシート（プリント）

ウ 比較シート（プリント）

プロフとエントリーシートの比較。

	年 経 歴 氏 名	プロフ	エントリーシート
① 目的			
② 内容			
③ 表現			
④ 成果			

両の面にプロフを利用しているの？目的にあった内容を公開しているの？
 ① 目的が達成できたの？② 表現は簡潔か？③ 内容が作ったプロフは、相手に
 どんな印象を与えるだろうかと考えてみよう！

（４）実施の流れと留意点

1時間目

ア プロフの利用状況を質問

- ・利用したことがある生徒の感想
- ・便利だと思うこと
- ・不便だと思うこと

イ エントリーシートの説明

- ・今時の就職活動
- ・履歴書との違い

ウ 比較（プリントに記入）

- ・何のために利用するのか
- ・伝えたい相手はどんな人か
- ・伝える内容は何か
- ・どんな表現をしているか
- ・どんな効果があるのか

2時間目

ア 前回の振り返り（プリントに記入）

- ・自己PRに必要な情報は何か
- ・どんな表現方法が適切か

イ エントリーシート作り

- ・エントリーシートの書き方を調べる
- ・自分なりのエントリーシートを書いてみる

ウ まとめ

- ・他の生徒が書いたエントリーシートと比較してみる
- ・プロフの使い方を振り返ってみる
- ・これからのプロフの使い方を考える
- ・授業の感想を記入させる

授業において留意したこと

ア プライバシーに配慮し、生徒の個人情報の扱いには十分注意する。

イ エントリーシートを記入させる際には、効果的な自己PR法はないか、調べさせる時間や考えさせる時間を作る。

ウ 生徒同士で作成したシートを比較し、感想を述べ合う時間を作り理解を深める。

エ プロフを利用している生徒には、個人情報の取り扱いや、安全な利用方法について振り返り、注意を再

エ 振り返りシート（プリント）

学習に活用。

プロフとエントリーシートの比較。

年 経 歴 氏 名

① 個人情報を漏らす際に気を付けなければならない事項はなんだろう？

② 効果的な自己PR法はないだろうか？調べてみよう！

③ エントリーシートを作成してみよう！

→ 別紙

④ 今回の授業の感想。

び呼びかける。

オ 情報を発信する際の責任について触れ、情報社会に参画する態度を身に付けさせる。

(5) 評価

ア 比較シート

プロフとエントリーシートの違いについて、項目ごとに比較した内容を記入した。

イ 振り返りシート

ネット上で自己PRする際気をつけるべきポイントを考え、記入した。

ウ エントリーシート

就職活動へ意識を向けさせるとともに、効果的な自己PR法について調べ、考え、実際にエントリーシートを作成した。

エ 授業への取り組み

授業中の態度や、発言の様子。

- ・ア～ウの提出物はそれぞれ5段階で評価した。

(6) ふりかえり

ア 生徒の授業の感想（原文のまま）

- ・プロフは自分の思い通りに書けるが、エントリーシートは会社に出すものだから思い通りに書けない。エントリーシートは会社によって内容が違う。
- ・プロフは簡単に楽しく書けたりして、できるけど、エントリーシートは堅苦しく詳しく書くから、ちょっといやだ。プロフとエントリーシートは正反対だと思う。
- ・プロフの掲示板を見て、プロフとエントリーシートの違いがわかりました。
- ・プロフとエントリーシートは互い自己紹介から始まるが、プロフの場合は自由に略語を使ったりくだけた表現が多く、プリクラなどで撮った写真を貼り付けて自由性がある反面、エントリーシートの場合、採用に必要な情報や学歴、証明写真や言葉遣いにも気をつけないといけないし、その会社の志望動機も書かないといけないことがわかりました。
- ・プロフとエントリーシートを比較することに驚いた。プロフとエントリーシートでは伝える情報がまるで違うように感じたが、特技や趣味などよく考えると共通のものがあったりして感心した。
- ・プロフを使用する際、気をつけていきたい。
 - ・プロフは誰でも見られるので、内容を注意して書かないといけないと思った。エントリーシートはしっかりとした敬語を使って書く。

エントリーシートは企業に採用してもらうためのものなので、ちゃんとした言葉でやんないとだめだなと思いました。

- ・エントリーシートはやっぱ難しい。志望動機や入社後の生活を具体的に書いておけばしっかり伝わるんだなとわかった。プロフの作成は結構気をつけてやったほうがいいということがわかった。どちらも自分をアピールするためのものなので自己主張が大事だとわかった。エントリーシートの「学校で学んだこと」や「性格」といったところが特に難しかった。
- ・プロフは人の目をあんまり気にしないで自分のスタイルでけっこう簡単にすらすらと書けちゃうんですけど、エントリーシートはそんな風には書けなくて、自分をあらわすのは一緒なんですけど書き方や言葉使いに気をつけなければならないことと、それを正確に表す難しさや大変さをわかりました。

やり方は一緒なのにもものすごい差がありました。いつかはエントリーシートを書くかもしれないので、それに備えて何回か書いてみようと思います。

- ・目的としてないんだったらやらない方がいいと思った。プロフだと全国に見られるけどエントリーシートは企業の人にしか見られない。

イ 授業見学した教員の感想（原文のまま）

「表現」ということにこだわった、的を絞った授業であったと思う。ワークシートの構成も要点が良くまとめられていた。

プロフの目的のところでは、単に作る目的だけでなく、他人のプロフを「見る目的」についても生徒に問いかけをしていた。生徒も熱心に授業に参加し、「ひまつぶし」というような本音も漏らしていた。ワークシートの書き込みには、生徒からの意見が活発に出て、それを書画カメラに写して書き込んでいたが、板書よりとても見やすくよかったと思う。

プロフを書き込むに当たっての注意喚起も、項目ごとに良くなされていたと思う。「友達だけが見るわけではないこと」「学校名などを書いてはいけないこと」など具体的に細かく例を挙げていたところが生徒にはイメージが持ちやすく、わかりやすかったと思う。生徒指導にもつながっていることを強く感じた。（筆者はこの授業のこの展開をみて、エントリーシートなど進路の意識には縁の薄い1年生にあえて授業

をしてみたいと思った。)

エントリーシートに関しては、「書類上の面接」であり、この表現・内容が良くなければ採用の土俵にも上がれないことを昨今の就職事情とともに詳しく説明していた。特に自己PRについては、業界分析・自己分析が重要であり、それができていなければ書けないことも強調されていた。それらの説明は、3年生で進路の実現に向けて日々試行錯誤している状況の生徒にとっては、とても身近に感じたに違いない。発言も活発で、メモも熱心にとっていた。

エントリーシートには、自己分析などのオリジナリティのある内容は勿論であるが、その一方で「形式的な表現」も重要であり、それができることが、社会常識があることのアピールになることも強調されていた。「誰に伝えるのか」、「誰に何を評価してもらうために表現するのか」、「それは効果的であるか」というところが順を追って考えていけるような授業展開であり、それを効果的に進めるワークシートになっていたと思われる。

この後の授業としては、「個人情報の取り扱い」や、「情報モラル」などを展開することが効果的ではないかと考える。

ネットワーク上でのコミュニケーションに関して、今回の授業は、生徒にとって身近なテーマであり、発問も具体的で、身近な問題であり、生徒が興味・関心を持ち、積極的に取り組める良い授業であった。

ウ 授業を行って有効だった点

- ・プロフという題材が生徒にとって身近なものであったので、生徒は積極的に実体験を発言することができた。高校生が普段使っている言葉の意味を質問したところ、生徒の発言が増え、授業が盛り上がった。

例：「いつメン」「JK」「ぶつもり」「オラニャン」等。

- ・実施した時期は、生徒が就職活動を行っている時期と重なっていたため、エントリーシートについても興味を持って取り組んでいた。
- ・感想を見る限りでは、こちらの伝えたかった内容が生徒に伝わったと感ずることができた。
- ・授業公開をすることによって、教員・生徒が緊張感を持って授業に臨むことができた。

エ 改善を必要とする点

- ・エントリーシートの作成に思った以上に時間がかかってしまった。エントリーシートの書き方をインターネットで調べさせたところ、さらに時間がかかってしまった。もう少し短時間で実施できるよう、シートをすべて埋めるのではなく、穴埋めのプリントにするなど工夫が必要だと感じた。
- ・エントリーシートの作成に時間をかけすぎ、これからのプロフの利用について、話し合う時間を作ることができなかった。
- ・1・2年次に実施する場合には、エントリーシートよりもプロフについて考えさせる時間を多くとったほうが効果的ではないだろうか。

実践c (2時間で実施)

(1) 授業を行ったクラスの概要

情報Cの授業内で行った。対象とする生徒は、3学年理系クラス37名(男子34名、女子3名)。コミュニケーションにおけるネットワークの活用は学習済みである。ほとんどの生徒がA0入試等で大学・専門学校に進学する。ちょうど入試の時期と重なり、自己PRや志望動機の添削を受けている生徒が多かった。

(2) ねらい

プロフとエントリーシートを比較した後に、エントリーシートを作成することで、情報発信する際には、目的により適した表現方法を選択することの重要性を理解させる。また、プロフに関しては、個人情報を掲載することの危険性について考えさせる。

(3) 教材の説明

ア プロフ例 (画像)

高橋

【名前】
りょうけんじ 左から

【性別】
女

【誕生日】
6月21日
たまに夏至の父の日になる

【職業】
広木小(鹿児島)
↓
染井野小(千葉)
↓
淵崎小(神奈川)
↓
関東六浦小(中)
(現)高2のバリエーション
す
クリスチャン

【趣味・特技】
来たら必ずかきつけて

姓名		性别		年龄	
身份证号		民族		籍贯	
职业		学历		学位	
工作单位		联系电话		电子邮箱	
联系地址		邮政编码		备注	

姓名		性别		年龄	
身份证号		民族		籍贯	
职业		学历		学位	
工作单位		联系电话		电子邮箱	
联系地址		邮政编码		备注	

其他事项

姓名		性别		年龄	
身份证号		民族		籍贯	
职业		学历		学位	
工作单位		联系电话		电子邮箱	
联系地址		邮政编码		备注	

[illegible]

情報 C プロフとエントリーシートの比較	
_____組 _____番 氏名_____	
◆インターネットを利用して、プロフとエントリーシートの特徴をまとめ、比較する。	
1. 何のために利用するのか。利用する理由を考えられるかぎり書くこと。	
プロフ	エントリーシート
2. 伝えたい相手はどんな人か。実際にどのような人が書かれた内容を見るのか。	
プロフ	エントリーシート
3. 伝える内容は何か。氏名、住所など項目を全て書きなさい。	
プロフ	エントリーシート
4. どんな表現が使われているか。特徴的な文章を抜き出して、それを読んでどう感じたかをまとめなさい。	
プロフ（特徴的な文章）	エントリーシート（特徴的な文章）
プロフ（読んで感じたこと）	エントリーシート（読んで感じたこと）

- ・略語、話し言葉、若者言葉を多用している。
- ・同世代向けになっている。
- ・文が明るい。

- ・気軽にからみやすい。
- ・メール感覚で書かれている。
- ・自分の悪いところも良いところも書いてある。
- ・謙遜とタメ語がバラバラ。
- ・自由に書いていて、たまに何が言いたいかわからないことがある。
- ・この人がどんな性格なのかわかる。
- ・キャラ立てをしようとしている。
- ・距離感をなくそうとしている。
- ・いろんな個人情報（誕生日や学校、県）がのっているので、とくに誕生日は暗証番号としてつかわれているのが多いので危ないと思った。
- ・友人など作るのに快適なコミュニケーションの一種だと思いました。しかし、誰が読んでいるのかわからないという点が不安だと思いました。

イ 生徒のエントリーシートの書き方を調べての感想

- ・真面目に書かなくてはならない。
- ・すべて敬語で書かれている。
- ・言葉づかいに気をつけながら、自分の良さを伝えている。
- ・すごく難しい質問だと思う。
- ・志望理由など前向きに自分を客観的に見ている。
- ・誰が読んでもわかる。
- ・きっちりとした文章で入りたいという気持ちが伝わってきた。
- ・全体的にかたい。
- ・自分の良い所のみを書き、いかに相手に好印象を与えるかが大事なかんじだった。
- ・面接を受けている感じだった。

ウ 授業を行って有効だった点

- ・進路意識が高い時期に授業を行ったので、集中してエントリーシートの作成に取り組んでいた。
- ・実際にエントリーシートを作成することで、授業のねらいである「目的によって異なる表現方法を用いる重要性」を生徒が理解できたと感じた。

エ 改善を必要とする点

- ・今回授業を行ったクラスでは、プロフの利用は既に行っていない生徒が多く、SNSを利用する生徒が多かった。今後はプロフに限定するのではなく、様々なコミュニケーション手段を比較する授業を行う必要がある。
- ・ほとんどの生徒は情報の授業を通して、既にプロフの危険性やエントリーシートとは表現が異なることを理解していた。エントリーシートそのものを作成するのが授業の目的ではないので、1時間で授業を行うことも考えたい。

- ・実際に後日、文系クラス39名（男子12名、女子27名）で1時間で授業を行った。進路意識の高い生徒だったので、1時間でもねらいどおりの授業ができた。そのときの授業の流れは、以下のとおりである。

（ア） プロフの利用状況を質問

- ・プロフの便利さ、不便さ、利用しない理由、興味のあるなしについてメールで教員に送信する

（イ） エントリーシートの説明

- ・今時の就職活動

- ・履歴書との違い

（ウ） 比較（プリントに記入）

- ・何のために利用するのか
- ・伝えたい相手はどんな人か
- ・伝える内容は何か
- ・どんな表現をしているか
- ・どんな効果があるのか

（エ） エントリーシート作り

- ・エントリーシートの2項目を書く

（オ） まとめ

- ・他の生徒が書いたエントリーシートと比較し、感想を発表する

- ・これからのプロフの使い方を考える

授業において留意したこと

- ・エントリーシートの書き方については、参照させたいインターネットサイトを生徒に転送することで、生徒が調べる時間を大幅に短縮することができた。

3-2 Webカメラを使ったコミュニケーションの工夫

○題材設定の理由

以前から、人間関係が発達過程の生徒間ではコミュニケーションがうまく成立しないことによるトラブルが少なからず発生していた。そしてこの問題は、携帯電話やインターネット、メールなど情報通信機器を利用した新しいコミュニケーションツールの登場によって、さらに深刻さを増しているように感じる。新しいこれらのツールの特徴・特性を正しく理解せず、うまく使いこなせていない現状があると考え。そのような環境の中で、携帯電話やPCに数百万画素のCCDカメラが標準装備され、TV電話やビデオチャットに利用されている。

この題材では、円滑なコミュニケーションを成立させるにはどのような要素が重要なかを理解させるのが目的である。そのために、Webカメラを使ったビデオチャットの実習を行い、対面コミュニケーションとWebカメラを介したもので、いくつかの状況を比較する。それらの比較の中で、コミュニケーションが成り立つかどうかという点を注目させることによって、情報通信機器を使ってコミュニケーションする際の注意点と、コミュニケーションに重要な要素に気づかせ、対面でのコミュニケーションを円滑に成立させるための工夫に応用させる。

○題材の目標

ア コミュニケーションには“言語的要素”・“非言語的要素”があることを学ぶ。

イ 円滑なコミュニケーションには“非言語的要素”が重要であることを学ぶ。

対面でのコミュニケーションとWebカメラを介したコミュニケーションとの違いに気づかせる。このとき、コミュニケーションをする状況の設定として「1対1」、「1対多」の2つの状況に分けて、Webカメラを介したコミュニケーションを行ってみる。この2つの状況を通して、円滑なコミュニケーションを行うには、

ア 言語的 …… 言葉・文字など

イ 非言語的 …… 視線・うなずきなど

という2つの要素があり、円滑なコミュニケーションには“非言語的要素”が重要で、情報通信機器を使ったコミュニケーションではそれらの非言語的要素の情報が制限されることが多いので、言語的要素の情報でそれらを補うよう工夫・注意する必要があることを気づかせる。

実践a (1時間で実施)

(1) クラスの概要

授業実践を行ったクラスは、3年次の必修科目情報A履修者34名（男：女 13：21）であり、どの年次も女子が2/3程度を占める。

実践校の特徴として、小・中学校時の不登校経験者の学び直しの場としての性格がある。事实在籍生徒の半数以上は不登校経験者であり、そのため、対人コミュニケーションを苦手とする生徒も少なからずいる。進路としては、進学希望者・就職希望者が半々である。進学希望先としても、大学・専門学校が半々の状況である。大学は推薦・AO入試がほとんどである。

(2) 授業のねらい

コミュニケーションは、「言語的要素」と「非言語的要素」から構成され、円滑なコミュニケーションを行うには「非言語的要素」の方が重要であることに気付かせる。そして、携帯電話などのデジタルのコミュニケーションツールを使う際には、「非言語的要素」が伝わりにくい性質を持つので、それら削られた要素を意識的に補完しなければならないことを、発信者・受信者ともに意識しなければならないことを気付かせる。

(3) 教材

ア ワークシート（プリント）

イ Skype（ソフトウェア）

ウ Webカメラ

エ ヘッドセット

オ 学習指導案

Webカメラは120万画素HD画質で、2千円程度で購入した。画質的にはもっと低品質のものでも十分かと感じる。

(4) 授業の流れ（留意点を含む）

ア 事前準備

本来は、2時間分の授業として考えていたが、実施時期の関係で1時間分の授業として行った。そのため、教員側で事前準備する項目が多くなった。実施予定に時間があれば、これら事前準備を授業として行うこともできると考える。

(ア) Skypeのインストール

(イ) Webカメラの接続・ドライバインストール

(ウ) Skypeアカウントの作成（40人分）

(エ) Skypeのコンタクトメンバーの追加

(オ) Skypeアカウントを書いた紙

実際は、項目アとイを同時に行い、40台のPCに設定するのに1時間程度、40人分のアカウント作成に30分程度かかった。そして、項目エは、Skypeで通話を

するには事前にお互いのログイン名を”コンタクトメンバー”として登録しておく必要があるための作業である。今回は、5人一組6グループとしてコンタクトメンバーを作成した。作業時間は30分程度だった。また、項目オは、生徒にSkypeをログインさせるときの分かりやすさのためである。

イ 授業（1時間分）

（ア） 生徒に馴染みのある携帯電話などのコミュニケーションツールについて発問

（イ） Skypeやヘッドセット等の機器の説明

（ウ） グループ分け

授業準備の項目（オ）で用意した紙を生徒に配り、3人1グループにして自分がどのグループに所属しているのかを明確にする。

（エ） 3人でのビデオ通話

このとき、どのようなしぐさをしているか、普段の対面の会話と異なる点はないか注目しながら、ビデオ通話させる。

（オ） まとめ

コミュニケーションの言語的要素と非言語的要素について、プリントにまとめる。

（5）評価

ア ワークシートの内容

イ 授業への取り組み姿勢

（6）授業の振り返り

ア 生徒の感想

- ・楽しかった。
- ・初めて使った。もっと使ってみたい。

という感想が多いなか、

- ・隣の人とだったから、話すことがなかったです。
- ・楽しかったけど、何か少し恥ずかしかった。
- ・メールや電話より、相手のしぐさなどが分かった。
- ・ちょっと普通の会話と同じようにするには、コツが必要だなと思いました。
- ・顔が見えるせいか、話しづらかった。

という感想もあった。特に、最後の「顔が見える」のに「話しづらい」という矛盾した感想が今の生徒のコミュニケーションについての現状を表しているように感じた。

イ 有効だった点

- ・SkypeやWebカメラといった普段使ったことがないソフトウェアや機器を使ったため、生徒の参加意欲を高めることができた。
- ・コミュニケーションには、言葉にならない「非言語的要素」もあるということを気付かせた。

ウ 改善を必要とする点

項目アの生徒の感想にもあったように、グループ割りによっては隣の人とSkypeを通じて話すという状況が生まれてしまうので、工夫が必要である。また、2時間分を想定しているが、若干実施時間が厳しいようであった。アカウント作成の際にパスワードについての話や、進学・就職の面接の際の姿勢などの内容を織り交ぜて、やや長期的な授業とした方が、時間にゆとりができると感じた。

ワークシート

Webカメラを使ったコミュニケーションの工夫：ワークシート	
3年 組 番 氏名	
1	先生がWebカメラを通して、話しているときどんな印象を受けましたか。 ☞実際に前で話しているときと、視線や身振りなどに注目しながら、比較しましょう。
2	ビデオ通話をして、対面での会話との違いがありましたか？ 違いがあった ・ 違いはなかった
3	その理由を以下の項目に注目しながら書いてみましょう ☐ 視線は？ ☐ しぐさは？ ☐ 話し始める・話し終わるタイミングは？
4	コミュニケーションの工夫
5	まとめ
6	感想

3-3 同じ資料でプレゼンテーション

○題材設定の理由

プレゼンテーションの授業を行う場合、スライドの作成に時間がかかり、発表時間や、その後の評価になかなか時間がかけられないことがある。また、スライドや発表内容が異なると、一人ひとりのプレゼンテーションスキルを同じ基準で評価することが難しい。また、生徒も発表内容やスライドの完成度に重点を置く傾向にあるため、プレゼンテーションスキルの重要性を理解することが難しい。

今まで行ってきたプレゼンテーション実習では、テーマ設定から始め、情報収集、資料作成、発表、評価までの一連作業をすべて行ってきたが、資料作成に時間がかかり、評価に時間をかけることができなかった。また、生徒は発表内容やスライドのアニメーションに注目してしまい、プレゼンテーションスキルの重要性を実感することができなかった。

そこで、発表に使用するスライドと原稿を事前に教材として用意し、全員同じ資料で発表を行わせ、相互評価させたいと考えた。そうすれば、プレゼンテーションスキルのみを評価することができるのではないだろうか。情報機器（スライド）を利用したコミュニケーション（発表）においても、人と人とのコミュニケーションには工夫・努力が必要であることに気づかせ、より伝わりやすい表現をするための工夫を考えさせ、実践させたい。

○題材の目標

基本的なプレゼンテーションスキルを理解させるとともに、より魅力的に伝えるための工夫を考えさせる。また、発表練習の時間を確保し、より効果的に伝えるためには、練習が重要である点についても、体験を通じて理解させる。

全員が発表し、相互評価・自己評価をすることで、新たなプレゼンテーションスキルを発見させる。

評価を基に話しあい、改善案を出させ、改善案を基にもう1度練習・発表を行い、再評価をすることで、コミュニケーションの工夫・努力に終わりが無いことを伝える。

○実践の比較

実践例aは3年の選択科目として実施。実践例bは1年生の必修科目として実施。

実践例 a では、同じ原稿・資料を用いるが「下を向いて原稿を読む」「前を向いて堂々と話す」など8種類の条件を生徒に選ばせ、演技をさせながら発表し相互評価させている。単に発表の練習になるだけではなく、

望ましくないと思われる条件も演技させることにより、コミュニケーションの基本的な部分に目を向けさせ、伝わり方の違いを体験させることを目指している。

実践例bでは、同じ原稿を用いるが簡単なスライドを作成させて、条件を付けずに発表を行い相互評価させている。様々な発表の仕方を見ることによって、他人の良いものを吸収し、また、自分の発表を振り返り今後活かすことを目指している。

実践方法は大きく異なるが、いずれの実践例でも、プレゼンテーション実習の中での発表の段階に注目し、話し方や態度といったコミュニケーションスキルの向上を目指して実践している点で共通している。また、この授業だけで終わらず、その後、問題解決型の実習を行い、その成果を発表する場面で活かすための練習になっている点でも共通している。

実践a （1時間で実施）

（1）授業を行ったクラスの概要

普通科の7クラス規模の学校で、大学・短大への進学が約4割、専門学校への進学が約4割、就職が約2割で、様々な進路への対応が求められている学校である。

授業を行ったクラスは、3年生25名の「情報実習」（3単位）選択者。1年次に情報Aを履修し、プレゼンテーションを経験している。さらに、1学期の授業ではアンケート集計を行い、その結果を分析し考察などをレポートにまとめた。

今回の授業は、アンケート集計結果を分析・考察したプレゼンテーションを行う前に、資料作成と並行して授業の前半で3日間に分けて実施した。

（2）ねらい

同じ提示資料、同じ原稿を準備し、こちらの与えた条件で演技をしながらプレゼンテーションを行うことで、純粋に話し方や態度といったコミュニケーションの基本的な部分に目を向けさせ、伝わり方の違いを体験させる。

（3）教材の説明

ア プレゼンテーションのテーマ「自己紹介」

イ 準備したもの

（ア）籤

下の8種類の条件が書かれた紙を用意し、封筒に入れ中身が分からない状態で発表者に選ばせる

下を向いて原稿を読む	聞いている人のほうを一度も見ずに、ずっと下を向いて読む
早口で話す	とにかく早口で、どんどんまくし立てるように話す
小さな声で話す	小さな声で自信なさそうに、ぼそぼそとしゃべる
「えー」「えーっと」を連発	「えー」、「えーっと」をできるだけたくさん入れて話す。
フラフラ、クネクネしながら話す	頭や顔・首などを触りながらクネクネ・フラフラした態度で話す
棒読みで話す	声の強弱を付けないで、ずっと同じ調子で話す
前を向いて堂々と話す	前を向いて聞いている人のほうを見ながら、堂々と話す
()の中を強調して話す	()の中の言葉を強調してはっきりと話す

誕生日は () 月 () 日で、
() 座です。

●クリック

性格は () だと思います。

●クリック

高 校 生 活 で 一 番 の 思 い 出 は 、
() です。

●クリック

高校生活も残り少なくなりましたが、たくさんの思い出を作ってみなんと良い卒業式をしたいと思っています。

以上で自己紹介を終わります。

(イ) スライド



(エ) 記録用紙

発表者以外が、発表を聞いて受けた印象や感じたことをメモする。最後の発表を聞いた後に、一番分りやすかった発表は何番目か記入する。

発表者 氏名	
発表順	感じたこと
1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	
9	

1番分りやすかったのは、何番目の発表者ですか

() 番目

(ウ) 原稿

() の中は、自分のことや架空の人物を想定して発表者が書き入れる

自己紹介原稿
これから簡単な自己紹介をします。 私の名前は () です。 () 高校の3年 () 組 () 番です。 ●クリック 住んでいるところは () 市で、いつも () で通学しています。 ●クリック

(4) 授業の流れ

ア 事前準備

(ア) 8～9人ずつ3つのグループにわけて、発表の順番を決めておく

(イ) 概要を説明して原稿を配布し、()の中に入る言葉をあらかじめ記入させておく

イ 当日 (50分授業の前半20分程度×3回)

(ア) 事前に決めてあった順番で発表者がスクリーンの前に出てきて籤を引く<聞き手には引いた籤の内容が分からないように注意した>

(イ) 発表者は聞き手には分からないように陰で練習

や打ち合わせを軽く行う＜指定された演技をできるだけ大袈裟に行うよう助言した＞

（ウ）発表者は自分の引いた籤の条件で演技をして発表を行う

（エ）聞き手は記録用紙に記入する＜話の内容ではなく、話し方や態度に注目して発表を聞き、感じたことを記入するように指示した＞

（オ）（ア）～（エ）を繰り返す

（カ）聞き手は全員の発表を聞いた後、何番目の発表が一番分かりやすかったかを記入する

（キ）記録用紙の回収

（５）評価

ア 記録用紙

話し方や態度に注目して記入できているかどうか、聞く態度等を総合して３段階で評価した。

イ 次回の発表

聞き手の記入する相互評価シート、発表終了後に作成した自己評価レポートで、１回目の演技をしながらの発表が意識されているかどうかを５段階で評価した。

（６）ふりかえり

ア 一番分かりやすかった発表の投票結果

	１回目	２回目	３回目
下を向いて原稿を読む		8	
早口で話す	4	1	
小さな声で話す			
「えー」「えーつと」を連発	2	4	3
フラフラ、クネクネしながら話す	3		
棒読みで話す		4	5
前を向いて堂々と話す	12	6	13
（ ）の中を強調して話す		1	

イ 授業を行って有効だった点

この発表の後に行った２回目の発表では、聞き手を意識した話し方、態度を心がける姿勢が見られた。また場数を踏むという意味でも、今回の発表は多少なりとも効果はあったのではないかとと思われる。

２回目の発表で聞き手が記入した評価用紙には、「聞いている人の方を向いて話していた」「重要なところを強調していた」など、話し方や態度を意識した記載が多くあり、聞く側の意識の向上にも繋がった。

準備にかかる時間やコンピュータ操作技術の差を気にすることなく、籤を引いたり演技をしたりといったゲーム性もあり、楽しみながら気軽に行うことができた。

ウ 改善を必要とする点

アの投票結果の通り「前を向いて堂々と話す」が、一番多くの人に分かりやすいと感じられたようである。しかし、２回目だけを見ると「下を向いて原稿を読む」が最も分かりやすいと感じられたようで、発表者の演技力やキャラクターが大きく関係しているように思われた。

今回は分かりやすかったものを一つだけ選ぶという投票形式であったが、「分かりやすかったか」「分かりにくかったか」の○×形式にしてみると、別の結果になることも考えられる。

実践b （４時間で実施）

（１）授業を行ったクラスの概要

１年生の情報Cの授業で実施した。多くの生徒がプレゼンテーションソフトウェアを使用していない。

学校の概要は、全日制普通科（１学年８クラス）、就職希望が数名、８割以上の生徒が大学進学を希望しており、そのうち半数以上がセンター試験を受験する。また、部活動が盛んで８割以上が参加している。

（２）授業のねらい

同じ発表原稿を提示するが、発表資料（スライド）は各自１枚程度作成させた。ただし、資料作成はあくまでも補助的なものである。

授業のねらい（目標）は、以下の３点である。

ア 資料作成の工夫

発表原稿に沿って、発表を補完できるように工夫して発表資料を作成すること。

イ 発表の技術の向上

発表原稿が既にあるので、声の大き・速度、抑揚、話の間、身体表現など発表する上での基本的なことを意識して発表すること。

ウ 評価とふりかえり

他人のスライドを見たり、発表の仕方を聞いたりして評価することにより、自分の発表を客観的に振り返り、どう改善すればよいかを考えること。

原稿の内容は提示されているので、差が出るのは、発表資料をどのように構成し、発表するかである。

資料作成や発表の仕方には、望ましい方法はあるが、これが正解というものがある訳ではない。発表を経験すること、見ることによって、問題点を改善し、他人のよいものを吸収し今後活かすことができればプレゼンテーションスキルの向上につながると考え実践した。

(3) 教材

ア 教科書

イ 発表原稿

発表原稿の一例；

「1. 荒川・利根川の二大河川や、長瀨、飯能河原などに代表される清流など、水辺空間に恵まれている埼玉県。県土に占める河川面積の割合は3.9%で全国1位です。荒川の鴻巣市・吉見町間の川幅は2,537mでこれも日本一。

3. 熊谷市では平成19年8月16日に最高気温40.9℃が観測されました。これは日本国内で観測された中では最も高い値なんです！（なお、この気温は、同日、岐阜県多治見市でも観測されています。）」など16項目。

(http://www.pref.saitama.lg.jp/site/saitama/iga_i.htmlより。ただし、タイトルは伏せる。)

ウ プレゼンテーションソフトウェア

エ 相互評価シート

オ 自己評価シート（エと同じ）

プレゼンテーション実習1：発表資料を作成しよう（埼玉を紹介しよう）。

班で相談し、分担して、PowerPointで資料を作成してください。
発表使用する元原稿は、裏面の通り。（これが発表原稿だと思ってください）
※分担して、全項目（16項目）を網羅するように。

★制作・発表について

- 制作 この時間と次回（2時間）
- 発表 各班 2分30秒以上3分以内（1人30～40秒程度）

★条件：

- 表紙にタイトルを入れる。
→タイトルは、班で統一すること
→名前を入れること
- 一人、1項目紹介し、班で5項目紹介できるよう分担すること。
- 元原稿から逸脱しないこと。
- 画像は、クリップアートのみ。
- アニメーションの使用可。
- 音は不可。
- スライド枚数は1枚

★ヒント：

分類、タイトル、キャッチフレーズ

★評価の観点：

スライドに関して

- 文字の大きさは
- （1スライドあたりの）情報量は適切であったか
- スライドと内容の整合性はあったか
- まとめ方に工夫があったか

発表の方法、話し方について

- 聞き手と視線を合わせて話すことができたか。
- 声の調子や大きさは適切であったか
- 話す速さ（話の間）は適切であったか
- 話す速さ（話の間）は適切であったか
- 手振り身振りなどの身体表現や姿勢は適切であったか。

★この実習の目的

11月の進路見学発表会につながるように

- わかりやすい資料の作成（分量、配置など）

を身に付ける

（参考：生徒への指示書）

自己評価・相互評価表	A	B	C	D
スライドに関して				
・文字の大きさは				
・（1スライドあたりの）情報量は適切であったか				
・スライドと内容の整合性はあったか				
・まとめ方に工夫があったか				
発表の方法、話し方について				
・聞き手と視線を合わせて話すことができたか				
・声の調子や大きさは適切であったか				
・話す速さ（話の間）は適切であったか				
※A・・・大変良い				
※B・・・おおむね良い				
※C・・・もう少し工夫が必要				
※D・・・改善が必要				

（参考：評価シート）

(4) 留意点と実施の流れ

「題材設定の理由」にある通り、スライド作成は方法によっては非常に時間がかかる。また、アニメーション設定などにこだわると本質を見失う危険性がある。そこで作成時間、スライド枚数など制約を多くし、あくまでも、「伝える」ために最小限度のものとなるように心掛けた。制約や条件を多くすることにより、自分のスライドや発表と比較しやすくなるメリットもある。制約・条件は以下の通り。

ア 発表方法は1人1つの項目を30秒程度とする。

イ スライドは1枚に限定。（クリップアートは使用してよいが、それ以外の画像は不可。）

ウ アニメーションは使用しても良い。（ただし原稿を読むだけで、15秒～20秒かかるので、実質簡単なもののしか使用することができない。）

エ どのような点に注意して作成・発表すれば良いかを明確にするため、評価項目を事前に提示する。

オ 発表原稿の内容は、理解に時間がかからないよう、身近なものとする。

カ 引用した元の資料には、タイトル（小見出し）があったが、あえて外すことにより、原稿のどこの部分をスライドに使用するか考えさせるようにした。（小見出しがあると、内容を理解しないで安易にスライドに使用する可能性があるため。）

1時間目

ア プレゼンテーションによる表現について講義

イ プレゼンテーションソフトウェアの操作実習

2時間目

ア 発表原稿提示・資料作成

イ 発表練習

3時間目

ア 発表資料作成

イ 発表練習

4時間目

ア 発表・評価

(5) 評価方法

基本的には、自己評価および相互評価に基づく。(評価シートは「(2) 授業のねらい」のア、イに基づいて作成。)

ただし、本校では、この後、進路見学会を実施し、その報告発表をプレゼンテーションソフトウェアを使用して行っている(発表は班単位)。今回の実習は、その報告発表に向けての練習の位置づけも兼ねている。そのため、他者の評価をしながらも、自分の発表を振り返り、どのような発表にすべきだったか課題を見つけ、次の発表の機会につながればよいと考える。

(6) ふりかえり

ア 授業を行って有効だった点

原稿を事前に全員に提示しているので、内容ではなく純粋に発表の部分に集中することができた。多くの発表を見る中で、自分にとって良い発表、悪い発表の区別がつく目が養われた。

そのため、2か月後に行った進路見学会の発表では、発表の仕方に今回の反省を踏まえた改善が見られた。

イ 改善を必要とする点

作業の効率化のために、班を作り1班3分以内(1人30秒程度)で8班の発表を行った。計算上は評価と班の入れ替えに3分とっても時間内に収まる計算だったが、実際には、時間が足りなくなるクラスもあった。丁寧に自己評価、相互評価を行うには、発表後4~5分程度必要であり、その場合、2班程度は前の時間に発表を行う必要を感じた。

また、どう改善すれば良いかをまとめる「振り返りシート」の作成を課さなかったが、プレゼンテーションスキルの向上という主旨からすれば、絶対に必要なものであろう。次回からは用意する必要があると強く感じた。

おわりに

今回の実践報告のように、同じテーマを複数の教員で実施することは、課題を共有し指導方法の工夫を研究できる、研究会という場があったからこそ可能であったと思っている。

実践報告からは各教員の工夫が見え、いろいろな切り口から、生徒のコミュニケーション能力の向上を意識した授業を展開できることがわかる。また、昨年に行った授業提案を実践することで、さらに授業を改善できるフィードバックも多くあった。新しい試みのため、実践して失敗することもあったが、その失敗もす

べて掲載することで、より効果的な授業の方法とは何か、提案できるのではないかと考えた。

生徒の状況は多様で、学校によって学習環境は違うが、今回の研究が情報科に求められている実践とは何かを考える機会となり、コミュニケーションの工夫を学ぶための指導を考えている方の一助になることを願っている。

【投稿論文】

写真からムービーを作る

埼玉県立芸術総合高等学校 教諭 西澤 廣人

はじめに

「コンピュータでムービーを作りたい！」と生徒からリクエストされたら……。

所沢西高校時代に部活動ではじめた時は、数人ならだいたいしようぶと考えた。生徒たちが積極的に取り組んでくれたので、翌年、「写真からムービーを作る」授業を3年生選択科目で行い、学校説明会でも上映した。はじめる前は、「教室のPC環境でだいじょうぶか」「作成に時間がかかるのではないか」など予想できない不安もいろいろとあったが、生徒たちと取り組んだら「ワクワクする授業」になるという期待のほうが勝った。トラブルは、経験しながら対処法をつかんでいけばいいと考えた。

この時にできた生徒の作品を当時新任の曾田先生に見せたところ気に入ってもらえた。二人で協力して教科「情報」の授業を始めた年に、すべてのクラスで「写真からムービーを作る」授業をすることができた。

所沢高校に異動になり、有志や部活動でムービーの作成を行った。昨年度は久しぶりに情報の授業も担当することとなった。転任してきた黒田先生と相談し、3年生の「情報A」全クラスで「写真からムービーを作る」授業をすることができた。あらためて、お二人と生徒たちに感謝したい。

さて、テレビのニュースで動画共有サービスでの映像が流れることが不思議なこととなり、ネットで動画を見たり、投稿したりということが一般的なこととしてとらえられるようになってきた。携帯端末を使って動画を撮影・編集することや、リアルタイムの中継をすることもできるようになった。日常ふれている映像が身近な道具を使って制作できる時代になった。

「そろそろチャレンジしてみるか」と考えている先生のために、役に立つレポートになればと思う。

1 動画の授業に入る前に

実習に入る前に、授業をイメージする。教師の側から見た流れと生徒の側から感じる流れの両方を考えてみる。実習の中では、学びは複雑にからまっている。「自由に作る」ことも「同じペースで同じものを作る」ことも、時間のコントロールはなかなか難しい。単位数が少ない科目では時間のコントロールが重要である。そこで、「制限の中で個性を発揮させる」ことと、学び

のポイントをシンプルにすることを心がけた。

(1) アプリケーションのツボは何か？

教科「情報」は、アプリケーションの操作方法を教える教科ではないということはよくわかっているのに、新しいアプリケーションを授業に導入するときには、ついつい多くの機能を紹介したくなる。教師が細かい説明を長々とすることで、生徒の活動の時間が少なくなり、結局何をすればいいのかが希薄になってしまう。

そこで、アプリケーションを使うときに「ここをつかめ」というツボをおさえることにしている。動画編集ソフトウェアでは「レイヤー」と「タイムライン」の概念だと考えている。

あとは、できるだけシンプルな方法で完成できるようにステップを考える。一度に多くを説明しない。オプションの機能は質問をした生徒に教えたら、次はその生徒に他の生徒は聞きに行くようにするなど、各自の必要に応じて機能を使っていく方法をとっている。

「レイヤー」の概念については、動画編集に入る前に、画像処理ソフトウェアでふれておくと入りやすい。

動画編集ソフトでは「タイムライン」を表示しないモードもあるが、一度「タイムライン」を見せておくと、細かい調整が必要になったときに役に立つ。

(2) 映像が先か、音楽が先か？

映像を作ってから後から音楽をつけるか、音楽にのせて映像を編集するかは、どんな作品を作るかによる。CMのような短時間でイメージを伝える作品を作る場合や、制作時間が短い場合は、曲のほうを先にきめて、そこに映像をのせるという形にするとスムーズにいく。

音楽を先にすることにして、曲はどう用意するか。

- ・ムービーの時間に合わせた曲

映像の途中で曲が切れたり、まったく違う雰囲気の曲につながると、少し興ざめしてしまう。

ムービーの時間を曲の時間でコントロールするために、30秒や60秒など指定した出来上りの時間に合わせた曲を用意しておくとうい。曲が長い場合は、この時間に合わせてフェイドアウトする。

- ・曲数は10曲程度

曲数が多くなりすぎると、選ぶのに時間がかかってしまう。また、苦勞してたくさん用意しても、生徒たちは同じ曲を選ぶことが多いかもしれない。ここでは、曲に合わせてムービーを作ることに重きをおき、曲が

重なったときはあまり気にしないようにとすることにする。

- ・歌詞が入っていないもの

歌詞が入っているものは、言葉の影響を受けてしまう。言葉で感動することも多いのだが、写真をメインにして組み立てるために、この授業では歌詞のないものにする。この条件をつけることで、「自分の好きなアーティストの曲を使いたい」という生徒の希望を牽制することができる。(こうした声は、音楽著作権の話をするきっかけになる。タイミングよく話をするために、プリントや資料などを事前に準備しておく。プリントがあれば、短時間で説明でき、細かいことは読んでおくようにと指示ができる。)

- ・著作権をクリアする

ネットで自作曲をフリーで公開している人に許諾をお願いする、ループ素材を並べて作曲できるアプリケーションを使って自作する(関心がある生徒にやってみたらと声をかけたら、短時間で作ってくれた)、著作権保護期間が切れたクラシック音楽を演奏するなど、どうクリアするのかについても教材になるので、いろいろ調べて試してみる。また、あらかじめ曲が用意されているコンテストがタイミングよく開催されていればそれを利用する手もある。

(3) 作成は、グループか個人か？

授業の中にグループ活動をどう入れるかは簡単ではない。組み合わせをどうするか、評価をどうするか、生徒たちは協力しあえるのか。

悩みは多いが、グループで取り組むイベントとして映像制作を考えるのも1つの手だと思う。社会に出ると、好き嫌いを超えて協力し、途中経過を報告すること、スケジュールに間に合わせることに、人に伝わるように発表することを求められることは多い。映像制作ではこうした要素を授業に入れやすくなる。

グループにすると作品数が少なくなる。

メリットとしては

- ・上映会の時間のコントロールがしやすくなる

1人1作の場合は、30秒の作品に発表者コメントだけ→1人1分でスムーズにいったとして40分。2人で1作にすると、その分をコメントや相互評価の時間にまわせる。また発表者席への移動時間も、入れ替わりの回数が少なくなることで減らすことができる。

- ・サポート対象が減ると、サポートを手厚くできる

機材の準備やトラブルへの対処に追われてしまうと、制作へのサポートが手薄になってしまう。慣れないうちは数が少ないことはありがたかった。PCが不調なときも、別のPCを使うことで対処した。また、グループ内にいる頼りになる生徒の力もありがたかった。その分、苦手な生徒が集まったグループへのサポートに時

間をかけることができた。

一方、不安要因への対処として

・組み合わせについては、家庭科など他の授業でどうしているのかをリサーチしてみる。あわせてグループ活動時のクラスの様子もきいてみる。

・評価は、個人レポートの中にグループ内評価を入れる、作成中に積極的に取り組んでいる生徒をチェックしておくなどでカバーする。(作品としての評価は上映会で認められることで、個人の評価は活動をどうふりかえっているかで。)

(4) 動画ファイルの書き出しはどのようにするのか

動画編集ソフトでは完成した後に、「書き出し」が必要になる。動画ファイルの書き出しにはいろいろな形式があるので、迷う場合も多い。また、書き出し時に圧縮作業が加わるのでムービーの長さやPCの能力によってかなり時間がかかることがある。また、ファイルサイズが大きくなりすぎて、コピーができなかったり、他のPCで再生できないなど、せっかく完成していたのに上映会直前で大騒ぎということもあった。

作成前の設定と書き出しの形式について、授業で使う素材を使って事前に試して、どう設定し、どのくらいの時間がかかるのかを確認しておく必要がある。

また、書き出し場所や素材の一時置き場についても複数台で同時にテストしておくといよい。ネットワークでサーバに素材をおき、書き出しもサーバという状態はかなり負荷がかかる。負荷をさけるためにはローカルのハードディスクを利用する方法もある。(ビデオ映像を扱うときには、ローカルのハードディスクに作業用のworkフォルダを作り、環境復元がかからないように設定した。)

また、ファイル名の付け方や、素材ファイルの入れ方などは指示をまとめたプリントを作るとよい。(動画の編集ファイルは、素材ファイルの場所が変わるとリンク切れのトラブルになることもあるため。)

(5) 素材は動画か写真か

最初にチャレンジするときには、素材は写真にしばらくといていいのではないだろうか。

現在、ビデオカメラや携帯で撮影した動画ファイルには複数の形式が混在している状況である。ファイル形式によっては取り込むときに、変換作業でかなり時間がかかる場合や、ファイルが巨大なためそのままではPCが動いていないのかと思えるほど反応が遅くなる場合もある。このあたりも調べて試してみると、現在の環境にそった方法を見つけることができるのだが、それなりに時間がかかる。

さて、写真を利用するときには、肖像権への配慮を考えなければならない。前任の2つの高校で担当していたときには、入学許可候補者説明会で、個人情報保護

と携帯電話などネットでの問題に対処する話をするときに、行事等での写真の活用について説明するようにした。どんな目的で利用することがあるのか、使ってほしくない場合は気軽に申し出てほしいなど。ここで説明した上で、授業の際にももう一度話すようにした。

また、生徒が撮影した写真を利用する場合は、メモリカードにもいろいろな形式があるので、小型のメモリカードにも対応しているリーダーを複数台用意するとよい。授業で利用を始める前に、写っている人に確認するなど、他人への配慮と、使われたくない写真の場合はきちんと申し出るようにと強調した。

一方、学校によっては生徒の顔が写っている写真の利用が難しい場合もあるだろう。自然や食事など人物が入っていないもの、後ろ姿や手などが入っていて顔は写っていない写真を使う方法もある。具体的な個人がうつりこんでいないことで、自分にとっての体験をイメージしやすくなるメリットもある。ぼけていたり、ぶれている写真でも、つなげてムービーにすると雰囲気伝えることができる。

学校の現状にあわせてどんな写真を利用するかを考え、チャンスをみつけ撮影しておく。また、同僚の中に撮影している人がいる場合は、協力をお願いしておく、使える写真の幅が広がる。

2 最初の授業- オリエンテーション

ゴールを示して、簡単な練習をする。

(1) 何のために作るのか

目的を明確にしておく。見せる相手、見せる時期を明らかにして、そこでどんなメッセージを伝えたいかを考えさせる。メッセージは、はっきりとした文章でなくても、イメージをあらわすキーワードだけでも最初はかまわない。(最後の発表のときまでには、メッセージを短い文章でまとめられるようにするとよい。)

上映会は大画面で行い、見る人が発表者と作品のほうに向きあう形がベストだと考える。映画館のように暗くして、音を再生する環境も整えると、作品が持つ力をより引き出すことができる。

クラス内での上映会だけでなく、各クラスの優秀作品の上映会を放課後に行ったり、学校説明会で上映したりというゴールを前もって示すと、より高いモチベーションで取り組む生徒があらわれた。いい作品が出てくると、その刺激が次のいい作品を生む。

目的とゴールのイメージを最初に伝えることが重要である。作成途中でも時々このことを確認しに帰ってくるができるようにワークシートで強調しておく。

(2) どんな作品を作るのか：参考作品を見る

先輩の作品や教師が作ったサンプルを見る。場合によっては、写真から作られたCM映像なども参考にな

るだろう。

参考作品は複数回見せるといい。何枚の写真が使われていたのか、画面を切り替えるときにどんな効果を使っているのか、文字はどうかなど、2回目以降は、どこに注目したらいいかを伝えてから見るようにする。「視点」がはっきりすると「見えて」くるようになる。一度こうした視点をつかむと、その後、テレビや映画を見ていてもこうした点が見えてくるようになる生徒が多いようだ。意識して映像を見るようになった生徒は、次の時間に作成するときまでに見方が成長していることも多い。

サンプルを見せるだけでなく、見る視点を示して、自ら気づくようにもっていくことがポイントである。

(3) 簡単な練習をする

ア・写真を数枚選ぶ

選ぶ写真の枚数は教師が示す。選ぶ時間がかかる生徒も少なくないため、この場面では、選ぶもとになる写真の枚数はあまり多くしない。

イ・並べる順番を考えて、つなぐ

組み写真を事前に体験していれば、ここではそのときの経験が活きる。

「時間順に並べる」「ストーリーができるように並べる(写真をみながら話ができるように並べる)」を基本として、「動きがつながるものを並べる」「形や色など画面で見えているものでつながるものを並べる」などのヒントを、作業をしている途中で伝えていく。

ウ・音楽をつける

場面転換の効果など、アプリケーションの使い方には深入りせずに、次は音楽をつける。

まずは音楽がないまま、PC上で上映し、それにあいそうなBGMを数曲用意した中から選ぶ。選んだ曲をつけ、再度上映する。写真だけで上映したときにくらべ、曲がついていると、どう感じかわるかを体験させる。

時間がある生徒には、本番で使う曲を用意したフォルダの中から選ぶように指示をする。

エ・肖像権について

学校行事などの写真では、写っている生徒が使ってほしくないと感じる場合もある。撮影時に許可をとっていたとしても、イヤな場合は遠慮なく申し出ることと、その場合はサーバや作品から写真をはずすことなどをきちんと伝えることが重要だと考える。

さらに、自分たちが撮影した写真を使う場合、仲間内ではよくても、クラスの中で見せるには適さないものがあることについてもふれておくといいだろう。

今回は曲をまず選び、その曲にのせて、選んだ写真をつなげていくことを予告する。余裕があればCMや映画の予告編を分析的に見ることを宿題に出す。

3 写真の選択とストーリー

今回からがムービー制作の本番。各時間の最初に今日クリアすべき目標は何かを説明する。制作がはじまると、ペースはそれぞれになってしまう。先にいっているものには、深くなるように振り返って修正するための指示をし、遅れが気になっているものには、おさえるべきところを示して、次の段階にいけるようにサポートする。

さて、最初の段階ではおさえることは次の2点。

(1) 写真の選択に時間をかける

ここに時間をかけることで、どんなメッセージを伝えるのか、どんなストーリーにするのかがかたまっていく。個人制作の場合でも、友達と話しながら写真を選択することは、思いがこもった作品づくりに役に立つように思う。また、学校行事の写真などを使うことで、学校に対する愛着や自分がすごしてきた日々についての肯定感を強くすることも多い。この部分は、時間を十分にとり、できるだけ急がせないようにする。

(2) 選ぶ人にとっての写真の意味

写真は必要な枚数に数枚プラスしたものを選び、そこから絞り込むようにする。絞り込むときに、自分がなぜその写真を選んだのかを意識させると、冷静に選択できるようになる。自分や自分の友達が写っている写真ばかりを選ぶ生徒もいる。自分が主役のストーリーを作ることももちろんOKだが、そのときに、状況を説明するための写真を加えると、より伝わるようになるということをヒントに出しておく。(悲しくなっている空をみあげている写真のあとに、青空だけの写真をつなぐなど)

4 タイトルとクレジットを入れる

曲に選んだ写真をのせた次の段階は、文字をいれる作業である。

(1) タイトルに個性を出すか？

タイトルに個性を出しなくない場合は、作り方を統一しておく。個性を出したい場合は、アプリケーションのタイトル機能を使うよりも、アナログな手法をまぜると変化が出る。手書きのものを撮影する、それをオーバーラップさせるなど、早めに制作がすすんでいる生徒にいろいろ試すことをすすめるのも手である。

なお、凝りすぎてしまうと作品のイメージと異なってしまうかえってマイナスになるので、あくまで「シンプルに」を強調しておく。

(2) クレジットの入れ方は統一しておくとい

作品の最後に、制作者やスタッフ、情報の何年度の授業で作ったものかなどのクレジットを入れる。フォントやサイズ、位置などは統一しておく、年度を超えて上映するときにはわかりやすい。

5 画面の切り替えと動きをつける

(1) 画面の切り替え

ぱっと切り替わるカットイン・カットアウト、徐々に切り替わるフェードイン・フェードアウトを基本に、他の切り替えは極力使わない。

フェードは、黒または白の画面との組み合わせや、2つの画面をじょじょに切り替えるクロスフェードがある。写真のつながりが悪い場合は、黒や白の画面の間にはさんでフェードを使うことをヒントに出す。(チャップリンの映画で、途中で黒バックに文字が入るところなどを参考に。)

(2) 動きをつける

アプリケーションによっては、静止画にパンやズームの効果をつける機能を持つものがある。これを加えることで、写真だけでも動画のように見える。動きはじわっとぐらいいちょうどいい感じになることが多い。余裕がある生徒に紹介して、どう動かすのがこの写真やストーリーにとって最適かを考えさせると、作業工程の差を縮めることに役立つ。

6 試写会→再編集→上映会

試写会を行い、他の生徒の作品から刺激を受けて再編集を行う時間とることが理想である。ブラッシュアップをすることで、大きく成長できる。また、試写会の中で、自分が考えたストーリーと見る人が受けるミスリードについて考えさせることができると、映像をどう読むか、どう表現するかを深めることができる。

そして、最後の上映会はイベントとして盛り上げる工夫を考える。会場の雰囲気や音響も大事。個々の作品へのコメントの交換や優秀作3作品への投票など、相互評価が互いのはげましになる場を設定した。

おわりに

実習には教師の多くの意図が含まれている。ここではできるだけ自分の意図を記述することを心がけたが、足りない部分も多いだろう。何かお役に立てる点があれば気軽に質問をいただければと思う。

同じ「山」へ登るときにも、登り方はいろいろある。また、山もいろいろある。登ることを楽しめる山を見つけるきっかけになれば幸いである。

このレポートをたたき台として、自分や自分の目の前にいる生徒たちにフィットする方法をぜひあみだしていただきたいと願っている。

今年度は東京工芸大学芸術学部の写真学科で研修の機会をいただき、表現することの楽しさを実感した。これからも先生方や生徒たちから学びながら、生徒たちが生き生きと取り組み、自分自身もワクワクする実習を準備していきたいと考えている。

Web ページの制作 ―作品の制作意図を言語化する授業の実践―

埼玉県立朝霞高等学校 教諭 春日井 優

はじめに

昨年度、埼玉県高等学校情報教育研究会主催による授業見学会で、本校で Web ページの相互評価を行う授業の見学をしていただいた。授業終了後の研究協議の場でさまざまな質疑応答が行われたが、作品制作を行う際には計画の部分が重要であるということを改めて認識することができた。計画の部分では、著作権等の知的財産権の保護や情報機器の活用についての指導も挙げられるが、それだけではなく情報の表現・伝達の工夫を考えさせたり、Web ページによる情報の発信をコミュニケーションの一手段と捉え効果的に情報伝達を行ったりすることの指導も重要であると考えている。

今年度は、漠然と Web ページの制作を行うのではなく、効果的に情報を表現し、伝達を行うことができることを目標とし、Web ページの制作意図であるコンセプトを生徒に考えさせ、自身の作品のコンセプトを的確に表現できることを目指した授業の実践に取り組んだ。その授業の実践報告を行う。

1 学習指導要領における位置付けについて

平成 12 年 3 月に出された現行の高等学校学習指導要領解説情報編では、第 2 章第 3 節情報 C の第 2 (1) ウの情報機器を活用した表現方法の項で、「具体的な実践では、すぐにコンピュータで作業を進めさせるのではなく、テーマの設定や計画、発表や相互評価などにも十分な時間を配分するように配慮する。(中略)

- ・制作者の意図が十分に伝わるか
- ・表現内容がわかりやすいか
- ・表現手段と方法が適切であるか

などを自己評価や相互評価によって意識化させることも大切である。」と計画に関わる部分の扱いが挙げられ、制作意図であるコンセプトの指導について扱うよう挙げられている。

また、平成 22 年 5 月の新高等学校学習指導要領解説情報編では、直接制作意図について述べた部分はないが、第 2 章第 1 節社会と情報の第 2 (1) ウの情報の表現・伝達の工夫の項で、「目的や情報の受信者の状況などに応じて情報の表現技法及び情報機器を選択させたり、問題解決の手順を踏まえながら、あらかじめ作業の手順や素材を選択させたり、生徒自身に検討させる活動を取り入れる。」とある。ここに挙げられた表現技法や素材の選択ということは制作意図に関わる事

柄であり、本授業実践で取り上げている Web ページのコンセプトにあたるものと考えられる。

平成 21 年 3 月に改定された高等学校学習指導要領の総則では、教育課程の実施等に当たって配慮すべき事項として「各教科・科目等の指導に当たっては、生徒の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に関する関心や理解を含め、言語に対する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を充実すること」(第 1 章第 5 款の 5 の (1)) というように、生徒の言語活動の充実が挙げられている。情報科の指導内容においてもさまざまな場面で言語活動を行うことができるが、生徒自身の Web ページのコンセプトを言語化し表現することも重要な言語活動であると考えられる。本校の授業ではコンセプトという制作意図の部分表現することも重要な指導内容であると考え、時間をかけて指導することにした。

2 授業実践

(1) 本内容の授業での位置づけ

科目 情報 C

内容 Web ページの制作「〇〇の紹介」

(〇〇の部分は各生徒が決める)

授業計画 (1 時間は 50 分授業)

課題の提示・Web ページの作り方	1 時間
コンセプトを考える	2 時間

(本内容はこの部分)

テーマの決定・ページの検討	3 時間
Web ページの作成	5 時間
相互評価	4 時間
Web ページの修正	3 時間
修正した Web ページの相互評価	4 時間
計	22 時間

対象 全日制 普通科 1 年次生 40 名クラス

実施時期 9 月～12 月

(クラスによっては 1 月中旬まで)

場所 コンピュータ室

(2) コンセプトを考える授業の目標

コンセプトとはどのような考え方であるかを理解させ、生徒が制作する Web ページのコンセプトを他者

に伝えられるよう言語化できるようにし、そのコンセプトに基づいて Web ページの制作を行うことができるようにする。

(3) 授業の流れ

ア コンセプトとは何か

企業のテレビ CM を生徒に見せ、その後商品の特徴とテレビ CM によって消費者に伝えるときの伝達の工夫などを生徒に答えさせる。この活動を通して、コンセプトとはどのようなものであるか考えさせた。生徒に答えさせた後、そのテレビ CM のコンセプトとして企業側が挙げていることを説明するにより生徒に指導を行った。写真 1 は生徒が CM を見ているところである。



写真 1

イ コンセプトを言葉で表現しよう 1

専門学科を有する県外の高校の Web ページを生徒に見せ、生徒全員にその Web ページから読み取れるコンセプトは何かを言葉で表現させた。ここで題材とした高校の Web ページは比較的コンセプトを挙げやすいもので、できるだけ初めてコンセプトを言語化する生徒にも回答しやすいものを選んだ。

回答の方法として、生徒には Web によるアンケート入力フォームを利用し入力させたので、すぐに集約することができた。全員が入力を終えた後に生徒の回答結果を中間モニターに表示し、回答結果に対して主な回答を取り上げ、コメントすることにより、生徒がコンセプトとして Web ページを制作する基本となる考え方を表現できるように指導を行った。写真 2 はある高校の Web ページを閲覧している様子である。



写真 2

ウ コンセプトを言葉で表現しよう 2

数社の乳製品の企業の Web ページを生徒に見せ、上記と同様の方法で全員にそれぞれの Web ページから読み取れるコンセプトを回答させた。乳製品の企業を題材としたのは、生徒が特定の企業に対して思い入れがあるとは考えにくく、商品の差異もそれほど生徒からわかりにくく、各企業がそれぞれのブランドイメージを商品パッケージや Web ページなどで表現して消費者に伝えようとしているので、各企業や商品のコンセプトを考える題材として良いと考えたからである。写真 3 は企業の Web ページを閲覧し、生徒が考えたコンセプトを回答している様子である。また、図 1 は生徒が回答したコンセプトの結果を表示したものである。



写真 3



図 1

エ コンセプトを Web ページに反映する方法を考えよう

「暖かい」「高級感」「希望」といったコンセプトとする Web ページを制作する際に、どのような方法によって実現できるかを Web によるアンケートで回答させた。このとき、できるだけ言葉遣い、色使い、使用する画像、文字の大きさなどについて具体的にどのように表現すると実現できるのかを回答させるようにした。

オ グループによる検討

上記のウ・エで行った内容について、4 人 1 組のグループで話し合う時間を設け検討させた。それぞれのグループで検討した結果を代表者に発表させた。この際、他者と共感できる部分もあるが異なる認識も生じ、伝達するためには工夫が必要であることを生徒に理

解させたいということを目的に行った。写真4はグループでまとめた意見を発表している様子である。



写真 4

(4) 指導の留意点

生徒がコンセプトを言葉で表現できるように、Web ページ制作の基となる考え方となりうる表現は示すが、コンセプトは正解・不正解がある問題ではないので正しいかどうかという考え方にはならないように留意する必要がある。そのため、多様な意見が生徒から回答されるが、コンセプトになりうる表現になっていないものについては指導するが、指導者の求めている通りの回答でなくても、十分コンセプトとして考えられる意見に対しては許容する姿勢が必要だと考える。

(5) 評価

生徒に事後アンケートを行い、コンセプトという考え方を理解できたか、コンセプトを言葉で表現できるようになったか、コンセプトを実現するための工夫を考えられたかという観点で自己評価させた。この自己評価は評定をつける際には使わないこととした。その理由は、生徒が制作する自身の Web ページのコンセプトを言語化できるようにし、そのコンセプトに基づいて Web ページを制作するというのがこの授業の目的のため、生徒が制作した作品とそのコンセプトを評定に反映させることで十分であると考えたためである。

生徒が Web ページを作成した後は、Web ページ内に Web ページのコンセプトを書かせ、相互評価の観点に Web ページのコンセプトを的確に表現できているか、コンセプトに基づいて Web ページが制作できているかという2項目を設け、評価を行った。こちらの評価は情報Cの評定を出す際に用いている。

(6) 生徒の自己評価の結果

ア コンセプトという考え方を理解できたか

よくわかった	17%
だいたいわかった	75%
あまりわからない	7%
全くわからない	1%

回答が授業実施後で、わかった・だいたいわかった

という回答が多数を占めているが、いざ Web ページの制作を開始するとコンセプトの意味がわからないという者が徐々に増えてきた。より理解が持続するような指導を検討する必要がある。

イ コンセプトを言葉で表現できるようになったか

できるようになった	8%
だいたいできる	48%
できるものもある	43%
全くできない	1%

数社の乳製品メーカーの Web ページを題材にしたこともあり、2~3社のものがうまく言葉で表現できないため自己評価は低くなっていると考えられる。よりの確に表現するよう真摯に取り組んでいたことによるものと考えている。

ウ コンセプトを実現するための工夫を考えられたか

よくわかった	22%
だいたいわかった	69%
あまりわからない	8%
全くわからない	1%

具体的な文字フォントや配色など生徒にとって回答がしやすかったことにより、よくわかったが20%を超えたものであると思われる。これまでも生徒が制作した Web ページでも表現力は高いが言語により表現できていないものも多く見られた。(イ)(ウ)の回答結果から、抽象的な概念から具体的な工夫を考えることは比較的容易に行うことができるが、抽象的な概念を言語化することは難しいと考えられる。そのため、抽象概念を言語化する練習を行うことは、必要であると考えられる。

図2は自己評価の結果を集計したものである。自己評価にも Web による評価システムを利用した。本文中の数値と異なっているのは、本文中の数値は私が担当している3クラスを合わせた値であり、図2の数値はあるクラスの数値のためである。



図 2

エ 生徒の感想

- ・コンセプトについて書くのはとても大変だなと思いました。自分のHPではコンセプトをまとめるのは大変だけどがんばってまとめていきたいとおもいます。

- ・みんなのアンケートを見てみんなの考えている事が分るのがよかった！ 希望のが難しかった…
- ・ホームページの作成者の考えを読み取ろうとするとコンセプトに色々な工夫があることがわかりました。そういう風にホームページを見てみると面白いと思いました。これからはホームページや広告などをみるときはそういうところも見ていきたいです。
- ・普段は何気なく見てた CM やホームページだけど、改めて見て考え直していろいろな意図があるんだなって思った
- ・人によってイメージが結構変わるんだなーと思った。だれにでも同じようなイメージを与えるにはどうすればいいのかなーと思った。
- ・コンセプトをきめたりイメージにあう工夫は大変だけれどたのしい
- ・初めはよく分らなかったけど何回もやっているうちに分かるようになってきた
- ・まだ完ぺきにはコンセプトを言葉では表すことはできないが今までよりは確実に理解することが出来ました。みんなの意見を聞くというのは凄くいいなと思いました。
- ・コンセプトを考えるのは難しかった。
- ・言葉にするのは難しいと思った。人の意見を聞いて授業をして、共感できたり、色々気付かされたりしたのでよかったと思います。
- ・ホームページをみてこのページのコンセプトとは聞かれてもなにをコンセプトにしているかははっきりとわかりませんでした。しかし、この授業をうけていくうちにホームページのコンセプトをはじめとしていろいろなことのコンセプトに気づけるようになれたらいいなと思いました。
- ・どのサイトにも、様々なコンセプトがあることを初めて知りました。自分がホームページを作る時は、相手にどんなコンセプトかを分かってもらえるように工夫していきたいです。
- ・よく見るとホームページ毎にテーマが違って面白かった。
- ・Web ページのコンセプトについて考えて、使っている色などもちゃんと意味があって使っているんだなと思いました。
- ・最初、コンセプトの意味が全然わからなかったけど今回のこの授業でだいたいのことを知ることができたのでよかったです。また、授業にも積極的に参加できたのでよかったです。
- ・暖かい、高級感、希望のイメージの要素はみんな同じかんじなんだなと思いました
- ・企業によってはすぐにわかるようなものもあったけどわかりにくい奴もあって面倒ではあったが、楽しい

面もあったから個人的には±0な気がしました。

- ・わかることもあったけれど、わからないものもありました・・・
- ・コンセプトについて考える授業は少し難しかったです。
- ・やや漠然としていると思うちょっと分かりづらい

(7) 授業を実施しての考察

ア 有効だった点

(ア) 過去のものよりも制作意図を言語化できるようになった

一昨年、昨年の上位の作品と比べて生徒自身の Web ページのコンセプトとして書いたものと比較したい。

○ 一昨年度の生徒作品のコンセプト

- ・やはり・・・チワワの可愛さですかねえ
- ・私はコンビニはたくさんのジャンルのものがある中でそれぞれのよさを潰さずわかりやすくおいてあります。なのでわたしも『見やすい・分かりやすい』をコンセプトにこのホームページをつくりました。
- ・最近はやっている血液型占いや相性、性格診断など科学的に説明されていないけれど、それらは当たっていることが多いんです！みんなにも血液型別の相性や性格について興味を持ってほしいと思います！
- ・興味を持ってもらうってことですね。なので文字はあまり多すぎないようにしました。○○さんのイラストを中心にお楽しみください。
- ・クラスみんなを対象に、太鼓の種類やそれを彩る笛・鐘・チャップなど紹介し、太鼓の面白さを分かってもらおうと思います。
- ・コンセプトはバナナのすごさ！を伝えたいです。「安い・美味しい・体にイイ」というバナナのいろいろを、シンプルに伝えようとおもいました。

○ 昨年度の生徒作品のコンセプト

- ・アルパカがもこもこしていて、優しいイメージなので、このホームページも優しい色を使ってつくりました。
- ・ネコのかわいさを伝えたい!!!
- ・イルカや海をイメージして青を基調として、イルカの絵やアイコン、写真をできるだけ多く取り入れて見やすいように、自分なりに工夫したつもりです。
- ・さまざまな年代の人に、あらためてプリンの魅力を知ってもらい、さらに好きになってもらいたいです。
- ・私はテーマがトマトなので赤系の色を使うよう

にしました。また、各ページ毎に画像をつけることで、世界にはいろいろなトマトがあるのだと知って貰えたら嬉しいです。

- ・コンセプトは〇〇ということで〇〇の水色の水玉を背景にしました。

○ 今年度の生徒作品のコンセプト

- ・〇〇のほかの飴とは違う高級感のようなもの意識しました。パッケージの花柄をイメージしてかわいらしさも含めました。
- ・背景を黒にして TOP の文字を 金色でまとめてちょっとした贅沢を表現しました。
- ・このホームページのコンセプトは、「あたたかさ」です。かわいいイラストで癒され、あたたかい気持ちになればいいなと思い、このコンセプトにしました。オレンジや赤などの暖色系を意識しました。
- ・モノクローム 白と黒の組み合わせがカラスに合うと思った。
- ・「〇〇」のかわいさと、こんなキャラクターいたんだ！っていうのを知ってもらいたい！
- ・まずテーマに合わせて黄色やオレンジなどのかぼちゃをイメージさせてみました。またかわいらしい感じでパッと見 文章が沢山書いてあっても、難しく感じさせないように！字体も丸っこくして、読みやすく。

(商品名等は伏せ字にした。)

一昨年度のもの表現の多くは、「知って欲しい」といったものや、紹介するものの感想を述べたものが多く見られた。昨年度のものは、いくらか伝えたいイメージが言語化されるようになった。今年度のものは、伝えたいイメージとそれを具体化する方法が併記されたものが増えた。ここに挙げたものは、相互評価での上位の作品のコンセプトであるが、他の作品についても同様の傾向がみられた。

(イ) メディアリテラシーにつながる指導ができた

言語化して表現する経験を通して、生徒の感想にも挙げられているが、情報を伝達する際には発信者の意図が含まれているということを理解することにつながった点も有効だったのではないかと考えられる。メディアリテラシーについての説明は軽く触れる程度にししか扱うことができないが、発信者の意図を考えることで情報を批判的に見る経験をすることにより、十分効果を挙げられたのではないかと考えられる。

イ 改善を必要とする点

(ア) 題材の再検討が必要である

授業の題材として、コンセプトを実現するための工

夫のテーマが似通っているとの指摘が生徒の感想にもあったが、題材を練り直して多様な発想につながるようなものとする必要があると考えている。

(イ) 討論のさせ方の再検討が必要である

討論については、生徒を4人1組にしてグループを作り検討を行わせたが、残念ながら検討が活発に行われないグループがいくつも見られた。男女比、4人が1列に並んでいること、1度回答した設問に対し再度グループで検討させたことなどが理由として考えられる。このような討論の活動も言語活動の軸となりうる事項なので、より活発に行われるよう検討が必要である。

(ウ) 題材に合うコンセプトを考えるための工夫が必要である

出来上がった生徒作品を見て感じたことになるが、紹介するものに対してそれを紹介するWebページのコンセプトが効果的ではないように思われるものも散見された。コンセプトに正解・不正解がないとは書いたが、情報の発信力を高めるためには、紹介するものに合うコンセプトを考えるということも扱う必要があるのではないかと感じ、今後の検討事項としたい。

おわりに

問題解決のサイクルとしてよく PDCA (Plan 計画－Do 実行－Check 評価－Act 改善) サイクルが挙げられる。Web ページ制作では相互評価を行い、さらに改善し再評価まで行っている。このとき、出発点である Plan の部分が不十分であると、最後まで作品の出来不出来に影響してくる。PDCA サイクルが機能するためには、P の部分が要になっているのは間違いない。

今回の授業実践はWebページの制作についてのコンセプトを表現する部分に焦点をあてて原稿をまとめたが、Web ページに限らずプレゼンテーションでも他の情報発信でも重要であると考えられる。このことは、「必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力」という情報活用の実践力をはぐくむだけではなく、「自らの情報活用を評価・改善するための基礎的な理論や方法の理解」という情報の科学的な理解にもつながるものであると確信している。本稿が、今後さらに情報教育が発展するための一助となることを願い、本稿のまとめとしたい。

参考文献

高等学校学習指導要領 平成21年3月告示

高等学校学習指導要領解説 情報編

平成12年3月・平成22年5月

平成 22 年度 事業報告

月日	行 事 名	参 加 者 数	会 場	お も な 活 動 内 容
5/26 (金)	第 1 回理事会 総会 及び講演会	39	大宮高校	理事会（総会準備） 総会（役員、予算、事業計画） 講演会 東京大学 西垣 通先生 『ネットとリアルのあいだー真の情報倫理をもとめて』
7/6 (火)	第 1 回研究委員会	10	朝霞高校	委員長選出、本年度の活動方針、研究テーマの決定、全国大会での発表について
8/20 (金)	全国高等学校情報 教育研究会総会	9	金沢工業大学	役員、事業案の決定 決算、予算案の承認
8/21 (土)	同研究大会			基調講演 各都県研究発表 パネルディスカッション
8/24 (火)	第 1 回施設見学会	13	専修大学 生田キャンパス	施設見学・意見交換 大学のカリキュラムについて
8/30 (月)	第 2 回研究委員会	27	戸田翔陽高校	研究テーマについての具体的な検討 今後の日程についての詳細検討
10/12 (金)	第 2 回理事会 第 1 回授業見学会	27	戸田翔陽高校	授業公開 情報 A 授業者：戸田翔陽高 岩本 太一教諭 「Web カメラをつかったコミュニケーションの工夫」 意見交換会
12/13 (月)	第 3 回研究委員会	10	朝霞高校	研究テーマについての協議、検討 今後の日程についての詳細検討
1/21 (金)	第 4 回研究委員会	10	川越女子高校	会誌原稿のまとめ 今後の課題
3/25 (金)	第 3 回理事会	15	川越女子高校	今年度の反省 来年度の役員、事業案、予算案 総会について

埼玉県高等学校情報教育研究会会則

第 1 章 総則

第 1 条 本会は、埼玉県高等学校情報教育研究会と称し、事務局を会長の指定する学校におく。

第 2 条 本会は、埼玉県高等学校の教科「情報」の振興に努めると共に会員相互の研鑽をはかることをもって目的とする。

第 3 条 本会は、埼玉県高等学校連合教育研究会に属し、県内高等学校の教科「情報」の教職員および本会の趣旨に賛同する者によって組織する。

第 2 章 事業

第 4 条 本会は、その目的の達成のために、次の事業を行う。

- 1 教科「情報」に関する調査研究
- 2 見学会・研修会の実施
- 3 研究発表会・講演会の開催
- 4 研究会誌その他の発行
- 5 その他必要な事業

第 3 章 役員

第 5 条 本会には、次の役員を置く。ただし、平成 15 年度はこれによらないことができる。

- | | |
|---------|-------|
| 1 会長 | 1 名 |
| 2 副会長 | 若干名 |
| 3 研究委員長 | 1 名 |
| 4 研究委員 | 若干名 |
| 5 常任理事 | 4～8 名 |
| 6 幹事 | 若干名 |
| 7 監事 | 2～3 名 |

第 6 条 役員は正会員の中から、次の方法で選出する。

- 1 会長、副会長および監事は、理事会において選出し、総会で承認を受ける。
- 2 常任理事は、理事会において選出し、総会で承認を受ける。
- 3 研究委員長は、研究委員会において選出し、総会で承認を受ける。
- 4 研究委員は、理事会において選出する。ただし、委員会の活動状況に応じて増員することがで

きる。

- 5 理事は、各校 1 名推薦し、理事会において選出する。
- 6 幹事は、会長が委嘱する。
- 7 当分の間、理事は常任理事を兼ね、東西南北それぞれの地区から 2 名選出する。

第 7 条 役員の任務は次のとおりとする。

- 1 会長は本会を代表して、会務を総理する。必要により会議を招集し、その議長となる。
- 2 副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する。
- 3 研究委員長は研究委員会を代表して、会の業務を行う。
- 4 常任理事は理事を代表して、会の運営に当たる。
- 5 理事は各学校の会員を代表して、会の運営に当たる。
- 6 幹事は会の事務および会計を担当する。
- 7 監事は会計の監査にあたる他、理事会に出席して助言を与えることができる。

第 8 条 本会の役員の任期は 1 カ年とし、再任を妨げない。

第 9 条 本会は顧問を置くことができる。顧問は本会に特別に関係のある者の中から理事会の推薦した者について会長が委嘱する。顧問は会長および理事会の諮問に応ずる。

第 4 章 総会

第 10 条 総会は年 1 回、会長が招集する。また会長は必要があれば、臨時に総会を招集することができる。

第 11 条 総会においては、次のことを行う。

- 1 会則の改正
- 2 会務および事業報告
- 3 決算の承認
- 4 予算の決議
- 5 役員の改選
- 6 その他必要な事項

第 12 条 総会の議決は、多数決による。

第 5 章 理事会等

第 13 条 評議員会、常任理事会および理事会は、会長が招集し、会務を議しその運営に当たる。

第 6 章 研究委員会

第 14 条 本会に教科「情報」の研究委員会を置く。研究委員会は、教科「情報」に関する研究調査を行い、また会員並びにその他研究団体との連絡提携に当たる。

第 7 章 編集委員会

第 15 条 本会事務局に編集委員会を置く。編集委員は研究委員会より 2 名および幹事がこれに当たる。

第 16 条 編集委員会は、研究会誌、研究委員会の研究成果物の発行、その他必要な情報の提供に当たる。

第 8 章 会計

第 17 条 本会の経費は、埼玉県高等学校連合教育研究会の交付金および寄付金をもって当てる。

第 18 条 本会の会計年度は、毎年 4 月 1 日より翌年 3 月 31 日までとする。

附則

本会則は平成 16 年 1 月 7 日より施行する。

平成22年度 高情研 理事・役員

役員名	氏名	所属・職名
顧問	神山 輝夫	
顧問	松村 秀	
顧問	舘 眞一	
会長	矢部 秀一	川越女子高等学校・校長
副会長	勝又 健司	児玉白楊高等学校・教頭
副会長	小出 和重	鳩ヶ谷高等学校・教頭
監事	野島 一郎	上尾橘高等学校・校長
監事	福本 彰	大宮中央高等学校・教頭
幹事長（事務局）	鈴木 成	不動岡高等学校・教諭
幹事（会計）	齋藤 実	大宮高等学校・教諭
幹事（会計）	細沼 智之	羽生高等学校・教諭
幹事（行事・Web 担当）	岡村 起代之	浦和北高等学校・教諭
幹事（研究会担当）	春日井 優	朝霞高等学校・教諭
理事（東部）	田口 義弘	草加西高等学校・教諭
理事（東部）	石井 政人	越ヶ谷高等学校・教諭
理事（西部）	曾田 正彦	川越西高等学校・教諭
理事（西部）	西澤 廣人	芸術総合高等学校・教諭
理事（南部）	亀井 義弘	浦和北高等学校・教諭
理事（南部）	八巻 富士男	大宮高等学校・教諭
理事（北部）	坂本 修	深谷第一高等学校・教諭
理事（北部）	柳澤 実	妻沼高等学校・教諭

平成 2 2 年度 埼高情研 高連研役員

理事	矢部 秀一	川越女子高等学校・校長
評議員	勝又 健司	児玉白楊高等学校・教頭
	小出 和重	鳩ヶ谷高等学校・教頭
事務担当 (○印会計)	鈴木 成	不動岡高等学校・教諭
	○齋藤 実	大宮高等学校・教諭
	○細沼 智之	羽生高等学校・教諭
	岡村 起代之	浦和北高等学校・教諭
	春日井 優	朝霞高等学校・教諭

研究委員会

役職	氏名	所属・学校名
委員長	坂本 峰紹	新座柳瀬高等学校・教諭
委員	伊藤 剛志	川口高等学校・教諭
〃	岩本 太一	戸田翔陽高等学校・教諭
〃	沖田 敦志	所沢西高等学校・教諭
〃	黒田 紀子	川口東高等学校・教諭
〃	鶴見 美子	新座高等学校・教諭
〃	長谷川 万希子	福岡高等学校・教諭

編集後記

埼玉県立妻沼高等学校 教諭 柳澤 実

埼玉県高等学校情報教育研究会の会誌も第7号の発行となりました。今年度で3回目となる全国大会は初めて関東以外の石川県で開催されました。本会でも設立時に多方面にわたってご尽力くださった矢部先生を会長に迎え、本当に月日のたつのは早いものだと思うすにいられませんでした。

この会誌を編集している時点でチュニジアに発した政変はエジプトをはじめ中東各国に広がりを見せております。その評価は後世の歴史家に任せるとして、その伝播には Twitter や Facebook などの新しいメディア

の存在も大きかったとも聞きます。授業見学会でも Skype を利用した授業の提案がありました。私はなかなか時流についていけないのですが、新しい手法を授業に取り入れることができないか今一度検討したいと思います。

会誌発行に際しまして、ご多忙にもかかわらず執筆していただきました埼玉県教育局指導部高校教育指導課指導主事荻原康之先生、県立総合教育センター指導主事須藤崇夫先生をはじめ、多くの先生方に感謝申し上げますとともに、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

埼玉県高等学校情報教育研究会誌 第7号

発行 平成23年3月31日

発行者 埼玉県高等学校情報教育研究会 会長 矢部 秀一（埼玉県立川越女子高等学校長）

編集者 研究会誌編集委員会 副会長 勝又 健司（児玉白楊高等学校・教頭）

副会長 小出 和重（鳩ヶ谷高等学校・教頭）

事務局 埼玉県立不動岡高等学校 埼玉県加須市不動岡1-4-17 TEL 0480-61-0140

印刷所 ポプラ社印刷 埼玉県深谷市 TEL 048-572-9415
